# Annual Report
# of
# NICMC
# Osaka Medical College

# 2013

中山国際医学医療交流センター
Nakayama International Center for Medical Cooperation

目次

巻頭言

発刊にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹中　洋（学長）

Foreword・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Hiroshi Takenaka（President）

NICMC の国際交流戦略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・花房　俊昭（NICMC センター長）

1. 運営委員会委員 …… 02

2. 各診療科協力教員 …… 02

3. 国際交流協定締結校の概要 …… 02

4. 参加学生の声 …… 03

（2013 年度国際交流締結校との交流実績：受入・派遣）

■【医学部】

①. ハワイ大学

②. 中国医科大学

③. マヒドン大学

④. 台北医学大学

⑤. 韓国カソリック大学

⑥. アムール医科アカデミー

■【看護学部】

①. 台北医学大学

5. 第 13 回国際シンポジウム …… 46

6. 第 2 回国際交流シンポジウム（看護学部） …… 47

7. 社会貢献（地域との交流） …… 47

8. 交流協定締結校以外との交流 …… 47

9. センター長の医学英語勉強塾 …… 48

10. 留学奨学金 …… 48

11. 資料（Data of the CIER） …… 48

12. 2014 年度年間交流計画 …… 49

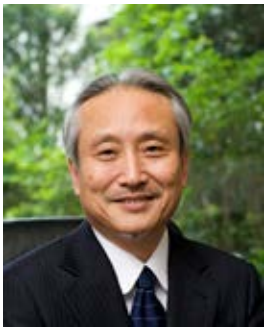
13. その他 …… 49

※. 各種統計実績 …… 49

※. NICMC の過去実績（2004～2013） …… 49

## 巻頭言

### □発刊にあたって



**竹中 洋 学長**

ここ数年間の文部科学省の方針や施策をみていると、大学にとって国際交流は大きな事業となっています。特に 4 年制大学においては、海外から学生を受け入れ、海外に学生を留学させることが大学自体の国際化として位置づけられています。しかし、医学部や看護学部の様に国家試験による免許を取得することが必要な「高度な医療技術を持つ職業人」では、国際交流は普遍的な大学の国際評価と重なることはありません。むしろ、我が国で必要とされる医療人が、国際的な視野を持ち、狭くなった地球人として活躍できる経験を積むことが第一の目標です。次に多くの外国の医学生や看護学生に、我が国の医療事情や研究、教育について理解を深めてもらう機会を提供することです。

幸い、NICMC は設立当初から、大旨この趣旨で活動を続けています。今秋からはソウル国立大学とも提携が開始されます。学生の皆さんは「見聞を広め、友をつくり、他国の文化を理解し尊重しましょう」、教員の皆さんは「積極的に研究や教育、診療の環境を共有して下さい」、スタッフの皆さんには、不慣れで、引っ込み思案に陥る我々日本人の手助けをお願いします。

### □Foreword

**Hiroshi Takenaka (President)**

It is apparent that the policies and measures taken by MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) in the past few years required higher educational bodies to emphasize on international exchange projects. Mutual student exchange is one of the criteria for an educational institution, especially a four-year university or college, to prove its effort to promote internationalization.

However, in such departments as medicine or nursing, where students are required to pass strict state examinations to be qualified as medical professionals, the term internationalization does not have the same connotation.

Rather, our primary goal of internationalization should be to nurture internationally minded medical professionals with a global vision in this smaller world, helping them build up medical experiences.

The second priority should be to open the door to foreign students by offering them opportunities to learn about Japanese medicine, medical education, and medical research.

These policies agree with the aims of NICMC (Nakayama International Center) and the center has been actively supporting international events and exchange programs.

Another exchange agreement was signed in October 2014 and we are soon starting our student exchange with Seoul National University College of Medicine. I would hope our students broaden their range of knowledge, make new friends, and understand and respect different cultures. The teachers are to share their resources for research, students' education, and medical practices. I am certain the International Center Staff is always ready to extend a caring hand to support and achieve our goals.

### □NICMC の国際交流戦略

**花房 俊昭 センター長**

今回、初めて当センターの Annual Report を発刊するにあたり、当センターの今までの活動内容と、今後の戦略について紹介したいと思います。

当センターは、医学教育、研究、医療技術の国際交流を目的として、平成 10 年 1 月に設立されました。海外の大学、研究機関、病院などと、学部学生の学生交流、大学院生や教職員による手術技術交流、研究室交流をはじめとする学術交流、また国際シンポジウムの開催や国際協力機構（JICA）への協力など、多岐にわたって交流を深めています。

海外との交流においては、一般的に教員同士のみの交流に留まる大学が多いのですが、本学では学生時代に培った交流こそが、大学院、医師へと道を進めた際に、さらにパワーアップできる大切な機会だと考え、学生交流にも注力しています。

学生交流においては、米国・ハワイ大学、ロシア・アムール医科アカデミー、タイ・マヒドン大学、中国医科大学、韓国カソリック大学、台北医学大学と、国際交流協定のもとで、カウンターパート方式で

交互に学生の留学を実施しています。平成26年度には、従来の交流校に加え、新たにソウル国立大学とシンガポール国立大学医学部との交流協定を締結する予定で、これからますます充実した国際交流が期待されます。また、平成25年度からは看護学部と台北医学大学との交流もスタートし、全学的な交流体制が整いました。これらの交流がいかに相互の学生にとって素晴らしい機会となっているかは、本Annual Reportに掲載されている学生のレポートをお読みいただければ一目瞭然です。

また、海外の医学教育システムや学生生活を知る目的で、毎年国際シンポジウムを開催しています。平成25年7月には第13回の国際シンポジウムを開催し、米国、中国、タイ、韓国、台湾に短期留学に行った本学の学生はそれぞれの体験を、そして、交流提携校から来日した学生は母校の大学紹介を、それぞれ英語でプレゼンテーションし、活発な討論が行なわれました。

さらに、当センターでは、本学研究者の海外留学や、外国人研究者の本学への受入をサポートする目的で留学支援制度を設けており、これまで多くの若手研究者がこの制度による渡航費用の一部支援を受けて留学しました。

これら今までの成果を基盤に、当センターの今後の戦略として、以下のような項目を掲げたいと思います。

1） 提携校の拡大
2） 受け入れ協力施設の拡大
3） 留学する本学学生の英語力向上支援
4） 留学する本学学生に対する経済的支援の拡大
5） 教室レベルでの相互交流の支援

これらの項目に重点を置き、今後の当センターの発展を目指したいと考えておりますので、引き続き皆様のご指導ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

**1. 運営委員会委員**

| | 氏 名 | 所属・職位 |
|---|---|---|
| 委員長 | 花房 俊昭 | 中山国際医学医療交流センター<br>センター長、内科学Ⅰ教授 |
| 委員 | 黒岩 敏彦 | 附属病院 病院長 |
| 委員 | 河田 了 | 医学部教育センター長<br>耳鼻咽喉科教授 |
| 委員 | 道重 文子 | 看護学部教育センター長<br>基礎看護学教授 |
| 委員 | 大槻 勝紀 | 解剖学教授 |
| 委員 | 朝日 道雄 | 薬理学教授 |
| 委員 | 米田 博 | 神経精神医学教授 |
| 委員 | 石坂 信和 | 内科学Ⅲ教授 |
| 委員 | 池田 恒彦 | 眼科学教授 |
| 委員 | 植野 高章 | 口腔外科学教授 |
| 委員 | 小林 貴子 | 老年看護学教授 |

**2. 各教室・部署協力教員（窓口担当者）**

| 教室名 | 職位 | 氏名 |
|---|---|---|
| 内科学Ⅰ | 専門教授 | 木村 文治 |
| 〃 | 講師（准） | 寺前 純吾 |
| 内科学Ⅱ | 診療准教授 | 津田 泰宏 |
| 内科学Ⅲ | 講師 | 伊藤 隆英 |
| 精神神経医学 | 講師 | 金沢 徹文 |
| 一般・消化器外科学 | 講師 | 田中 慶太郎 |
| 胸部外科学 | 専門教授 | 根本 慎太郎 |
| 脳神経外科学 | 教授 | 黒岩 敏彦 |
| 産婦人科学 | 助教 | 恒遠 啓示 |
| 眼科学 | 教授 | 池田 恒彦 |
| 耳鼻咽喉科学 | 准教授 | 萩森 伸一 |
| 皮膚科学 | 助教（准） | 穀内 康人 |
| 放射線医学 | 教授 | 鳴海 善文 |
| 麻酔科学 | 助教 | 宮崎 信一郎 |
| リハビリテーション医学 | 助教 | 仲野 春樹 |
| 口腔外科学 | 助教 | 木村 吉宏 |
| 救急医学 | 教授 | 高須 朗 |
| 解剖学 | 准教授 | 前村 憲太朗 |
| 薬理学 | 教授 | 朝日 通雄 |
| 病理学 | 教授 | 廣瀬 善信 |
| 微生物学 | 専門教授 | 中野 隆史 |
| 輸血室 | 准教授 | 河野 武弘 |

**3. 国際交流協定締結校の概要**

**1）ハワイ大学**

ハワイ大学はオアフ島のマノア（ホノルル市内）の他、ハワイ島のヒロなどにキャンパスを持つ州立の総合大学である。医学部はSchool of Nursing, School of Public Health, School of Social Workと共にCollege of Health Sciences and Social Welfareを構成している。医学部の歴史は新しく、1967年に2年制の基礎医学のみを履修する医学部として創立され（卒業生は米国本土の医学部3年に編入された）、1973年に臨床の2年を加え4年制の医学部となった。

ハワイ大学とは平成15年より、カウンターパート方式で相互交流を実施している。約6日間のPBL方式によるワークショップ（Clinical Reasoning等）への参加、約4週間のハワイ大学連携病院であるクアキニ病院での病院研修が中心である。

**2)中国医科大学**

中国医科大学は遼寧省(中国東北部:旧満州)瀋陽市に本部を置く中華人民共和国の国立大学である。1940 年に新生中国に最初に設置された国立大学である。古い歴史がある有名な大学として、中国の現代医学教育に重要な地位を占めている。7974 名のスタッフ、20426 人の学生がいる。1976 年から、中国医科大学は中国教育部が指定した留学生を受け入れられる最初の医科大学の一つとして、50 あまりの国からの数百名の留学生を受け入れて、現在は 24 の国から 400 名以上の留学生が学んでいる。

**3)マヒドン大学**

1888 年チュラロンコーン大王(ラマ 5 世)によって創立したマヒドン大学はタイ国で最も古い教育機関の一つである。大学は、全学生 1 万 9 千人以上の学生と 400 以上の大学のプログラムをサポートしている。2,600 以上の教授陣とともにその学生と先生の比率は 1 対 8 である。その比率はタイの高等教育研究機関の中では、最高の数値である。

119 年以上、マヒドンは、多くの変化と進歩を経てきた。現在、16 の学部、8 つの研究所、3 つの病院、そして 6 つの単科大学を持っている。

**4)台北医学大学**

台北医学大学は 1960 年に私立台北医学院として創立され、2000 年に台北医学大学と改称した。首都台北近郊に医学・歯学・薬学・看護学など7つの単科大学、13 の学部(学生数は 6000 名以上)を有する台湾有数の医療系総合私立大学である。2011 年の QS アジア・トップ 100 医科大学にもランクされており、特に医学部は 3 つの附属病院(合計 3000 床)を有し学生数は医学部・大学院を合わせて 1700 名が学んでいる。

**5)韓国カソリック大学**

韓国カソリック大学医学部(聖医キャンパス)は 1954 年の開校以来、生命を尊重する韓国医学界の先駆者としての役割を果たしてきた、ソウル市に本部を置く大韓民国の私立大学である。医学部は学生 1 人当りの専任教員の比率が 1.2 人と実習面において韓国内最高水準であり、最高の教育環境を誇っている。また、1200 床の韓国最大規模のソウル聖母病院(Seoul St Mary Hospital)をはじめとする 8 つの附属病院での実習を行っており、医学部学生のために START 医学シミュレーションセンター開設、ICM(Introduction to Clinical Medicine)等の新しい教育プログラムなどを提供している。

**6)アムール国立医科アカデミー**

アムール国立医科アカデミーは、南は中国黒竜江省と国境を接し、ロシア連邦極東管区に含まれるアムール州の州都ブラゴベシチェンスクに位置し、ロシア高等教育省の発表では、ロシア国内約 50 の医科大学中、第 2 位の教育、研究評価を受けている大学である。本学との交流は、平成 12 年以来、学生を対象とした 1 年ごとに交互に留学するカウンターパート方式で夏季短期研修を実施している。主に、第4・5学年が交流し、外科・内科・産科の臨床実習を行っている。

また、毎年ロシアのアムール国立医科アカデミーで行われている学生科学カンファレンスに、本学学生が DVD 録画もしくは Skype で参加している。

## 4. 参加学生の声(2013 年度国際交流協定締結校との交流実績:受入・派遣)

**■【医学部】**

**①. ハワイ大学**

**(ハワイ大学選択臨床実習派遣 学生 1 名)**

本学では国際交流推進の一環としてハワイ大学医学部と交流協定を締結し、学生・教員の相互研修を積極的に行っています。2013 年 4 月 1 日～4 月 26 日に河合裕美子さんを約 1 ヶ月間、ハワイ大学の連携病院であるクアキニ病院に海外院外選択臨床実習生として派遣しました。 以下に研修報告を掲載します。

**ハワイ大学での臨床実習に参加して**

派遣時 6 年生　河合裕美子

この度、4月 1 日から26日の4週間、ハワイ大学での臨床実習に参加させて頂きましたので、ご報告させていただきます。

**出発まで**

一ヶ月も日本を離れることは少し心配でした。何よりも、言葉が分からなければせっかくのチャンスを活かしきれないと考えていたので、週に一回の英会話レッスン、医学英語での症例検討会への参加、クリクラで当たった症例について英語の教科書を読むなど、自分なりに医学英語に触れるように努力しました。

**実習**

本当に充実していました。クアキニ病院の Internal Medicine(総合内科)では、入院患者さんを現地の学生と担当し、新規の入院があった場合は一から問診や身体所見をとることができました。入院患者様は毎日、morning round を行い体調や病状の変化をカルテに記録していくので、疾患の発症・治療・経過・副作用・予後などについてしっかりと学習することができました。三週間で何人かの患者様を担当するので、カルテの SOAP の書き方や problem list の挙げ方、疾患の分類や scoring の仕方、プレゼンの仕方など多くのことを身につけることができました。また、症例検討会や学生用講義にも参加させて頂き、鑑別診断の挙げ方や心電図の読み方も系統立てて学習する良い機会になりました。日本の症例検討会では診断をつけて終了ですが、アメリカでは診断後、どの病棟に入院するか、どれぐらいの頻度でモニタリングするかまで検討するので、とても実践的だと感じました。アメリカの医学教育は全てにおいて実践的で、カンファレンスや勉強会も、現在入院している患者様の症例をもと

に行われるので、無駄がなくとても勉強になります。日本の学生もきちんと勉強しているし、知識の量についてはあまり差を感じませんでしたが、実際に患者様の problem を把握したり、プレゼンする能力には大きな差を痛感させられました。学生の間にアメリカの医学教育に触れることができて良かったと思っています。

残りの一週間は、Dr.Tokeshi のクリニックで実習をさせて頂きました。実習内容については多くの先輩方が書いて下さっているので割愛させていただきますが、技術面だけでなく本当にたくさんのことを教えて頂きました。特に印象に残っているのが「医師は患者様のサーバント（召使い）」という精神です。患者様に謙虚な姿勢で自分のことを顧みずに診療に当たられる先生の姿勢をよく表している言葉だと思います。先生は本当に患者様への思いやりが強い先生で、私たち学生にも熱心に丁寧に指導して下さいました。実習は大変でしたが、先生に会うためにもハワイに行って良かったです。

**その他の日常生活について**

アパートは病院から近く、とても快適でした。高知大学や神戸大学の学生との共同生活も楽しかったです。週末は現地の学生と食事にでかけたり、買い物に出かけたりしました。私は同じ班の学生のキアナととても仲良くなることができ、一緒にビーチにも行きました。私にとってキアナと出会えたことは素敵な思い出です。

**最後に**

私の派遣に際しご尽力下さいました大学関係者の皆様、本当にありがとうございました。私にとってこの一ヶ月間は、かけがえのない素晴らしい経験になりました。ハワイ大学でご指導頂きました先生方にも感謝の気持ちで一杯です。この経験を糧に頑張っていきたいと思います。後輩の皆さんもチャンスがあれば是非海外に行って見て下さい。自分の目で確かめなければ分からないことがたくさんあると思います。

**（ハワイ大学学生短期研修受入　学生４名）**

2013 年 7 月 1 日から 7 月12 日まで米国ハワイ大学医学部 1 年生 Maegan Doi さん、Jennifer Nakamatsu さん、Nikki Mumura さん、Lauren Fu さんの 4 名が、海外選択臨床実習の一環として本学附属病院、三島救命救急センター、国立循環器病研究センターで研修を受けました。

[学生研修レポート(抄訳)]

**大阪医科大学での研修を終えて**

Jennifer Y. Nakamatsu さん（ハワイ大学医学部 1 年生）

私の大阪医科大学への短期留学は、予想を全てにおいて上回る人生においてまたとない経験となりました。胸部外科や消化器内科、産婦人科など様々な診療科・教室を見学しましたが、回診だけでなく手術も見学しました。ハワイでは手術の見学をしたことがな

かったのに日本で初めて体験することになるとは、なんとも不思議な気持ちでした。

胸部外科では根本慎太郎先生が心臓手術の経過説明や ICU 案内をして下さったのですが、先生の医学と医学教育についての情熱にとても刺激を受けました。又、輸血室の河野先生は輸血という分野で最近起こった変化や、まだ残っている問題点などを話してくださいました。ハワイでも血液提供の不足は問題だと思います。仕事や医学教育に対してのお二方の献身的な姿に医師になった時に自分もこうありたいと思いました。

三島救命救急センターを訪問した時は救急車で運ばれてきた患者さんが診断を下されてから画像撮影や検査に回されるまでの速さに驚きました。こんなに機器が豊富で層の厚い先生方やスタッフにあふれている施設を見たことがありませんでした。 国立循環器病研究センターでの見学も含め、研修中には素晴らしい経験を数えきれないほどさせて頂きました。

大阪医科大学の学生の方々にもシミュレーションセンターで指導してもらったり、京都を案内してもらったりとお世話になりました。とても楽しかったです。

研修プログラム以外のことになりますが、実は研修の前の旅行中にカメラを新幹線の中に忘れてきてしまい、今までの写真もなくなるし研修中も写真が取れないしどうしようと心穏やかでなかったのですが、ホテルのスタッフの方が駅に問い合わせてくださって無事見つかったという出来事がありました。日本は素敵な人々のいる素晴らしい国ですね。

私の人生を変えたこの研修中にお世話になった全ての皆さんに感謝します。ありがとうございました。

### 思い出深い夏

Maegan Doi さん（ハワイ大学医学部 1 年生）

今回が 4 回目の来日でしたが、医学を日本語で学ぶことになるのかなと最初不安に思っていました。しかし大阪医科大学の先生方のご配慮で英語で治療手順を説明して頂けたのでたくさんの事を学ぶことが出来ました。手術は今までに見たことがなかったので多くの手術を見学でき大変嬉しく思いました。特に胸部外科で初めて心臓がトクトクと動いているのを見たあのシーンは鮮やかに記憶に残ると思います。

三島救命救急医療センターは緊急患者のための専門医療機関ですが、医学生にとっては学習の宝庫です。専門医の先生方が一丸となって効率よく治療にあたっておられる姿は本当に感動的です。画像検査センターは患者さんが搬送される場所のすぐ隣にあるので医師が素早く適切な処置を決断することができます。このような施設がもっと出来ると良いなと思うと同時に、このような大変素晴らしい施設への見学の機会を頂いた事にとても感謝しています。

医学についての勉強もさることながら短期間に生まれた大阪医科大学の学生さんたちとの交流も大切な思い出となりました。七夕の日に縁日のお店で売っているベビーカステラを食べたり、キャンドルの周りに願い事をしたシールを貼って水に浮かべたり、嵐山で川下りをしたり、OMC の学生さんがハワイ大学のワークショップに来た時はダンボールのソリでハワイの丘を滑り降りて大笑いしたり、最後の夜にはハワイのビーチで美しい月を無心で眺めたり。まさにお金では買えない経験の連続でした。

日本とハワイで充実した最高の時間を過ごせた今年の夏を私は決して忘れないでしょう。大阪医科大学の先生方を初め関係者の方々、留学中暖かく迎えて頂き本当にありがとうございました。

### 大阪医科大学での臨床実習を終えて

Nikki Kumura さん（ハワイ大学医学部 1 年生）

大阪医科大学で医学的な手順を最初から最後まで実際に見るということはハワイ大学の授業で学んだことを実際に見るという意味で本当に貴重な経験でした。実際にその場にいて経験しなければ臨床は知識の域から出ません。

更に、様々な分野を見学することでこれまで机上で学んだことの理解を深めることができ、自分への新しい課題が見つかっていきます。私にとり大阪医科大学での実習での医療手順のほとんどが初めて実際に見るものでした。中でも潰瘍性大腸炎を大腸内視鏡で見つける検査は消化器内科を勉強したばかりだったのでとても興味深かったです。

小児科に興味があるので、小児科での回診は印象的でした。患者である子どもたちやそのご家族と話すこともできました。英語で話すことも含めて私達のために時間を取っていろいろとご尽力下さった先生方に本当に感謝します。

大阪医科大学臨床実習のプログラムで特殊な 2 つの医療機関を見学する機会に恵まれました。三島救急医療センターと国立循環器病研究センターです。三島救急医療センターでは運ばれてきた患者さんの精密検査がたったの何分かで終わってしまうのを目の当たりにし、国立循環器病研究センターでは大変珍しい先天性心臓病の治療を見学させて頂きました。これらの病院の効率的なシステムや患者さんへのケアの質の高さにとても感心しました。

また、異国における医学教育システムの違いや、健康管理をどうやって推進するかに関しての違いを知ることはとても面白く、双方にいい所悪いところがあり、その違いを尊重しあうことの大切さも学びました。

海外に留学するチャンスが有るなら是非行くべきだと思います。またとない臨床体験や異文化体験、これからもずっと連絡を取り合いたい友人たちとの出会い。わたしにとってまたとない貴重な体験となりました。

### 大阪医科大学での短期留学に参加して

Lauren Hu さん（ハワイ大学医学部 1 年生）

ホノルルの小さな日本人学校に通っていたので、幼いころから日本語や日本文化には親しんできました。今回、大阪医科大学に短期留学が決まり、医学も日本語も日本という環境で勉強できることになり、とてもわくわくしていました。

研修の二週間は毎日各科を回るうちに飛ぶように過ぎて行きました。

中でも胸部外科で術野には入らせていただいた時は、患者さんに尊敬の念をもって接する熟練した先生方から教わることができて、貴重な経験をしました。

将来ハワイで医療に携わりたいと考えているので日本で医療についてもっと学びたいと留学前から思っていました。日本人の先生方や患者さんと接した経験を通して日本の文化的な面について理解が深まった気がします。それが文化の違いに気配りができる医師になるために大いに役立つことになると思いますし、日本人の患者さんによりよい治療を提供できる力になると思います

お世話になった多くの先生方のご親切や、歓迎してくれた大阪医科大学の学生さんたちの友情は忘れません。

中山国際医学医療交流センターの皆様、大阪医科大学の先生方、学生の方々、このような一生に一度の学びの機会をいただきまして本当にありがとうございました。

**（ハワイ大学夏期ワークショップ派遣　学生８名）**

毎年３月に加えて８月にもハワイ大学医学部では学生向けPBLワークショップが開催されています。 平成 25 年度の夏は 8 月 11 日から 8 月 15 日まで本学とハワイ大学医学部の国際交流協定に基づいて、5 年生の川本雄也君、市原慎也君、西原悠君、辻雄平君、駒井翼君、竹宮由美さん、3 年生の前田広太郎君、末方由さん、の計８名がワークショップに参加しました。

**ハワイ大学ワークショップに参加した感想**

（川本雄也君）（5 年生）

今回ハワイ大学ワークショップに参加し、様々なことを学ぶことができました。まず、参加しようと思ったきっかけのひとつは、英語を勉強するためのきっかけが欲しかったからです。一緒に参加することになった人達とは、勉強会や、話し合いなど多くの場面で顔を合わす機会があるのですが、今回のメンバーはみな英語力を獲得する努力をしてきた方達ばかりで、同じ空間にいるだけで、英語の勉強の仕方、発音の仕方、間の取り方など、ネイティブからさえ学べないことをたくさん教えて頂きました。彼等と同じ時間を共有できたこともまたワークショップに参加した大いなる意義になったと言えます。

もうひとつの理由は、とにかく迷ったときは、一歩踏み出すに限ると考えたからです。一歩踏み出し、新しい環境に身を投じないと得られないことがあると考えたからです。実際、参加して得られた

ことは数えきれないほどありました。最も大きなことは、日本以外の国に大切と思える友人ができたことです。現地でハワイ大学の学生は本当に私たちによくしてくれました。自分の予定もかえりみず、毎日行きたい場所に連れていってくれ、毎朝ホテルから学校まで車で送ってくれました。果物や飲み物をわざわざ学校に持ってきてくれるなどの気遣いには、何でここまでしてくれるんだろう、と疑問に思ったほどです。

彼らにそれを聞くと、彼らが大阪医科大学で臨床実習を受けていた時に私達が彼らにしてあげたことを返しているだけだと言います。自分が、そんな優しさ、思いやり合いの空間に居ることができて、幸せだと感じました。

現地を発つ日、彼等は空港まで私達を見送りにきてくれました。そのとき、彼等は私達のために、泣いてくれました。

日本以外の国に、自分達との別れを惜しんで泣いてくれる仲間、また自分達も別れに涙を流せるような仲間ができたことを本当に嬉しく思いますし、大切な経験をさせて頂いたとおもいます。これからの人生、この経験は必ずどこかで生かされるとおもいます。一歩踏み出すことの大切さを改めて感じさせられました。ありがとうございました。

### ハワイ大学夏期ワークショップに参加して

（辻雄平君）（5 年生）

8 月 12 日～15 日にかけて、ハワイ大学夏期ワークショップに参加させていただいた。

具体的な実習内容としては、PBL (Problem Based Learning)を始め、心臓・肺の Physical Examination、模擬患者さんへの医療面接・身体診察のほか、気管支鏡・腹腔鏡・CPR の Simulation や、学生同士による注射の練習、禁煙外来のコミュニケーションの練習を行った。

特に印象に残ったものが PBL であった。症例そのものの内容に関しては、5 年生で一通り座学を終えている分、それほど難しいものではなかったが、やり方や目的に関して、日本での PBL と少し異なる点があるのを感じた。まず、必要事項 need to know について。本学での PBL においては、必要事項を挙げる際には、まず血液検査や、CT、MRI といった検査項目を次々に挙げることが多かったのであるが、ハワイでの PBL では、問診時に行う OPQRSTAAA に沿った内容がまず重視されていることに気付いた。問診の時点で、ある程度鑑別診断を絞る能力が大切なのだと感じられた。次に、受動的学習と能動的学習の違い。本学では、スライドによる受動的な PBL 講義の時間が中心とされているところが多いが、ハワイでは問題解決型の、いわゆる能動的学習が中心であった。学習項目 Learning Issues について、グループメンバーの前で、英語で発表するという機会があったのだが、本学では如何に要領よく、時間をかけずに準備するかということに重点が置かれていたようなものであったが、ハワイでは、（当然英語の）論文などをしっかり読み、準備し、output することで理解を深めるといった、自学自習の準備の過程に重点が置かれていると感じられた。また、普段から、ただ国試対策のためにテキストを読むだけでなく、NEW ENGLAND JOURNAL of MEDICINE や、PubMed など英語の論文を読んで知識の幅を増やすことも大事だと考えられた。

また、英語でのコミュニケーションの skill について、反省する点が多々あった。私は、大学に入学して以来、英語に接する機会もあまりなかったこともあり、海外に来たのは今回が初めてなのであるが、ネイティブの方の発音が初め、全く聞き取れなかったことには悔しい思いをした。事前の勉強会のおかげもあり、医学英語や、医療面接で使う英語は何とか頭に叩き込んでいたため、実習においてはさほど不自由は感じなかったものの、日常会話については「聞き取れないから話すこともできない」の悪循環の繰り返しで、大きな課題点であった。日にちが経つにつれて次第に聞き取れ、簡単な会話が成り立つようにはなったものの、もっと積極的に、自分の思ったことを表現したりすれば、より skill は磨かれたであろうし、ワークショップもより充実したものになっていたのだろうと思えた。今後は、日頃から英語に接する時間を増やし、英語の skill を磨いたうえで、また機会があれば海外留学してみようと思った。

そして、このワークショップを通し、何より感じたのが、自分の視野が大きく開けたことである。上述した通り、私にとって初海外でもあり、一歩海外に出ると、自分の常識が全く通じない点が多々あるのを感じた。文化の違い、価値観の違い、そういったものが新鮮に感じ取られた。現地の学生の方々との交流を通し、私も今までとは違った観点から物事を考えることができるようになったとともに、彼らの医学に対する意識の高さ、それでいて楽しむところは楽しむといった面には、非常にいい刺激を受けた。医学教育のシステム面に関しても、学生の時期からベッドサイドでのチームケアに参加したり、教師と学生が両方向に評価するといったことは、今の日本ではあまりないことであり、今後、日本の医学教育の発達において、視野に入れるのもいいと思えた。そして、医師になるにあたり、必要なことは、ただ患者さんを Cure したり、医学知識を身につけることだけでなく、Interpersonal に接することのできる、そのためには自分自身、もっと人間性を豊かにし、視野を広げることが大切なのではないかと考えるようにもなった。

最後に、今回のワークショップは、私にとって、非常に有意義なもので、すごく自分を成長させてくれた場になり、思い切って参加を決めてよかったと思っています。このような機会を与えてくださった、大阪医科大学の先生方、ハワイ大学の先生方や学生の方々、中山国際センターの職員の方々、本当にありがとうございました。この経験を今後にも是非活かしていこうと思っています。

### ハワイ大学ワークショップに参加させていただいて

（市原慎也）（5 年生）

一番初めにハワイ大学のワークショップに参加させていただきたいと思った理由は、ハウイ大学ワークショップに参加した同級生がみんな口をそろえて「とても楽しかったし勉強になった」と話すのにとても興味を持ったためでした。その時から、「ハワイ大学では周りの友達の言うようにきっとたくさんの事を学べるのだろう」と思っていたのですが、実際に参加してみて、予想していたよりもはるかに多くの事を学ぶことができてとても驚いています。ハワイ大学で学んだことは勉強に限ったものだけではありませんでした。

勉強面では、ワークショップを通じて英語での問診の取り方を教えていただいたり、PBL を実際にハワイ大学の学生にチューターをしてもらって体験し他の大学の日本人学生と一緒に症例を考えたり、身体所見の取り方を教えていただいたりしました。その中でも一番印象に残ったのが、注射実習です。大学ではなかなか注射を実際に人に打つ機会がないため、注射を学生同士で打つと聞いたとき最初はとても怖かったです。でもハワイ大学の先生や学生がとても丁寧に教えてくれたため、怖がりながらも注射を実際に人に打つことが出来て、今ではそれが自信になっていますし一番の思い出です。

他大学から来ていた日本人学生は皆勉強へのモチベーションがとても高くて、一緒に話していてとてもいい刺激になりました。また、ハワイ大学の学生が PBL のチューターをしてくれたこともあって、たくさんのハワイ大学の学生とも仲良くなることが出来ました。ワークショップの中には、授業後にみんなでピクニックに行く予定や、集合写真を撮る予定や、ウェルカムパーティーやフェアウェルパーティーなどもあったため、全く苦労することなく友達をたくさん作ることが出来ました。

このハワイ大学のワークショップを通じて一番感じたことは、ハワイ大学の学生への感謝の気持ちでした。特に僕らがハワイ大学に留学に行く前に、大阪医科大学に二週間留学に来ていた Jenn と Maegan には本当にお世話になりました。日本からハワイに着いたときから、レイを作って僕らを空港まで迎えに来てくれました。毎日僕らの泊っているホステルの前まで迎えに来て、学校や僕らの行くところどこにでも車で送ってくれました。朝ご飯やフルーツやお昼ご飯を大学まで持ってきてくれたこともありました。色んな観光地やパーティー、色んな美味しいレストランにも連れて行ってくれました。ハワイで僕らに出来ることはただ「ありがとう」ということだけで、すごくもどかしい気持ちでした。彼女たちは僕らのハワイに滞在していた 2 週間のほとんどを僕たちのために時間を使ってくれました。言葉がろくに通じず、右も左も分からない国で人の温かさを、身をもって感じることが出来ました。彼女たちとは今でもメッセージで近況を報告しあっています。一生大切にしたい友達です。

短い間でしたが、ハワイ大学で学んだことは本当にたくさんあって、ここには全て書ききれないほどです。この経験をこれからの医療関係者として、そして一人の人間としての人生に大いに活用していけたらいいなと思います。最後に、このような貴重な経験をさせて下さった花房先生をはじめとした大学の先生方、中山センターの職員の方々に心からお礼を申し上げたいと思います、本当にどうもありがとうございました。

**ハワイ大学ワークショップに参加して**

（前田広太郎君）（3 年生）

「人と人との繋がり」ハワイワークショップを一言で総括するなら、この言葉が真っ先に脳裏を過ぎります。

先ず今回のワークショップを通じて、JABSOM の学生の方々に公私ともに非常にお世話になりました。心より彼らにお礼を申し上げます。

さて、今回ワークショップに参加した 3 回生は 27 名中僅か 4 名と少数派でしたが、可能な限り早い段階の学年から参加されることを推奨します。というのも、ワークショップで受ける講習の数々は 3 年生にとって新鮮な内容に富んでいるからに他なりません。

先ず、ハワイ大学の PBL に関してですが、本場の PBL を英語で実践するのはこれからの勉強に対する姿勢を大きく変革させる体験でした。病名や症状、全ての医学関連知識を英語で習得することの有用性を身を持って経験させて頂いた事に加え、自分らの知識が如何に限局的であるか、また半端な知識は実践では機能しない事が現地の PBL では骨身に沁みました。海外での研修を考えている学生の方は、「日本語で医学を学ぶのと同時に英語を学ぶ」のではなく、「医学を英語で学ぶ」事が求められるのではないでしょうか。

次にボランティアの模擬患者さんに対して問診を行いました。今回の主訴は「呼吸困難」でしたが 3 年生の夏でも対応可能な症状でしたので、臆する必要は皆無です。問診の学習過程は OSCE にも応用の効く内容だったように感じます。何より、実践を踏む事によって度胸を養う事が出来る筈です。

また、今回は初めての injection を体験させて頂きました。Intradermal injection, self injection、intramuscular injection の 3 種類を英語の講義を踏まえながら挙行させて頂きました。先生や現地の学生が丁寧に指導して下さるので、安全且つ安心して基礎的な手法を修得出来ます。

そして、禁煙外来を体験させて頂きましたが、これは「傾聴」というコミュニケージョン能力が強く求められるパートでした。どの様に問診するか、質問を投げかけるかのスキルは比較的容易に会得することが出来る印象を受けました。しかし、海外の模擬患者の性格やバックグラウンドを思慮に入れつつ如才無く受け答えをするのは想像以上に一筋縄には行きませんでした。

最後に、ハワイワークショップはこの様な task を消化していく過程で他大学に属する共通の目的を持った友人との交友関係を育むことを可能にしています。この点こそ、ハワイワークショップの最大の意義といっても過言では無いでしょう。そして学生の皆さんにとって国内外でのネットワーク形成に大きく貢献するに違いありません。

総じて、私は学生生活の可能な限り早い段階でこういった海外研修の機会を能動的に参加していくことの必要性を痛感しました。ワークショップでの多岐に渡る経験は、自らの motivation を鼓舞に大きく寄与した素晴らしいものだったと断言出来ます。日常の学習に対する視野が広がったのと同時に、国内のみならず海外にも目を向けつつ学習しなければならないと気を引き締めて行く所存です。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった花房先生、米田先生、河野先生、及び松本さんを始め中山センター関係者の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

### ハワイ大学のワークショップに参加して

（末方由さん）（3年生）

私は、平成25年8月11日から15日までの5日間、ハワイ大学の医学部（John A. Burns School of Medicine）の夏期ワークショップに参加させて頂きました。

私は、海外はもちろん、日本でも医学生とワークショップに参加するという経験がありませんでした。その上、自分が3年生ということもあり、プログラムについていけるか、などとても心配でした。しかし、ウェルカムパーティーで Ms.Kochi があたたかく、迎えて下さって、プログラム参加者同士が get to know each other する時間を下さり、とても良い雰囲気になりました。そのおかげで、その後のプログラムも楽しく学ぶ事が出来ました。大阪医科大学で行っているPBLの元祖がハワイ大学でもあるので、普段の授業のPBLと進行はほぼ同じで、積極的に意見を言う事もできました。特に印象に残った実習は、Manikin Simulation です。バイタルもはかる事ができ、コミュニケーションがとれるマネキンを用いて、様々な状況でどう対応するかを実習しました。マネキンや、他の実習を用いて、スキルアップをした後、最終日にボランティアの Simulated Patient の方と医療面接をさせていただきました。医療面接をボランティアの Simulated Patient の方とするのは初めてだったので、とても緊張しましたが、上手くする事ができました。その後に、希望者は、Simulated Patient との医療面接の中での改善点、良かったところを指摘していただけました。とても良い経験になりました。

今回のワークショックで臨床技能や医学知識を学べた事はとても大きな事でしたが、ハワイ大学の学生、他のワークショップの参加者と知り合えた事がこれからの財産になると思います。ワークショップの参加者はみなさん、モチベーションの高い方々ばかりでしたので、インスピレーションを受けました。ハワイで得られたモチベーションを保ちつつ、これからの勉学にも励みたいです。今回はこのようなすばらしい機会を与えて下さった先生方、ハワイで指導をして下さった先生、ハワイを案内してくれたハワイ大学の学生、他のワークショップの参加者、先輩方、ありがとうございました。

### 「行ってみなければ分からない」多くのことを学べるワークショップ

（駒井翼君）（5 年生）

2013 年度夏季ハワイ大学ワークショップに参加することで、普段であればこれほどの短期間では得ることのできない多くの貴重な経験ができ、様々なことを学びました。自分の価値観に大きな変化が起こり、また人生に対する考え方や人との関わりの重要性など、こうして言葉では表現し難い多くのものを学び取ることができました。

当たり前ではありますが、海外旅行は旅行前から学習が始まっています。そもそも今回のワークショップには「まずハワイへ行き海外で生活しなければならない」というハードルがありました。意外に思う方もあるかもしれませんが、これは僕のような海外旅行経験がほとんどなく、一人旅をしたことのないものにとっては割と大きな心配事でした。航空券を取り、ホテルを予約し、空港からホテルへの移動方法を調べ、現地の規則やタクシーなどの乗り物事情、チップの有無やその額、さらにはワークショップが実施されるキャンパス（JABSOM）の位置やその行き方など、多くのことを事前に学んでいく必要がありました。これら多くの下調べの段階からすでに自分の学習はスタートしていたといえます。結論からいえばハワイというのは本当にいい場所で、いろんなものが現地で揃うし、現地の人も親切なので、それほどきっちり下調べなく行っても問題のない、「海外旅行にはハードルの低い場所」でしたが。

現地での学習はさらに激しいもので、僕の価値観を大きく変えるものでした。はじめて上陸したオアフ島で見る景色、肌に感じる風や温度、湿気、太陽の光、現地の人々の見た目や行動、車や建物、そういったものすべてが新鮮で 24 時間驚きの連続、学習の連続でした。「こういうところは日本と同じだ。」「こんなささいなことが日本とは違うのか。」など、普段では意識しないような対象にまで意識を向けることができ、改めて日本のことを客観的に見つめることもできました。普段とはまったく違った土地というのは、「その場に行く」というたったそれだけのことで学ぶものが大きいのだという、そういったことまでリアルに感じました。いつの間にか、もともと旅行が苦手な僕が、「もっとたくさん海外旅行に行って多くのものを感じ学びたい。」と心から思うようになっていました。これらの「現地でし

か得られない体験」は自分の価値観に大きな影響を与えたと思います。

申請時にワークショップ参加希望理由として挙げていたことに、「モチベーションの高い他の日本の医学部学生との交流」がありましたが、それによって得られた刺激や人脈は本当にかけがえのないものとなりました。予想以上に様々な大学のやる気あふれる医学生が集ってきており、ワークショップ中にとても仲良くなることができました。お互い目的が一緒のためか仲良くなるのにまったく苦労はなかったし、何より他大学の学生が大阪のノリを楽しいと思ってくれたのか、大阪医科大学の学生はかなりウケが良いように思いました。PBL 中、英語力においても、医学においても他大学の学生の意識の高さを感じ、改めて勉強への意欲が刺激されました。また、そういった向上心ある日本各地出身の仲間との友情が今後医師になってからも自分にとって非常に大きなものとなり、支えとなるのだろうなと今からワクワクしております。慶応大学の学生たちとワークショップ最終日の打ち上げで交わした「日本に帰ってからもよろしくな。」という言葉に、とても頼もしさと嬉しさを感じ、感動したのを今でも鮮明に覚えています。

そして、今回のワークショップで最も自分たちにとって大きかったことは、ハワイ大学の学生達との交流です。ハワイ大学の学生が臨床実習をするために大阪医科大学へ来てくれたときにも嵐山に観光に行ったりご飯に一緒にいったりと、たくさん交流したのですが、ハワイに着くなり彼女達の手厚い歓迎に驚きっぱなしでした。ワークショップが始まる前からハワイには到着していたのですが、その頃から車に乗せてあちこちの観光名所に連れて行ってくれ、とてもおいしい食べ物をご馳走してもらったり、本当にたくさんのビーチに連れて行ってくれたり、素晴らしい日の出を見に一緒に山を登ったり、毎日が彼女なしでは語れなかったです。人と人の交流の素晴らしさを実感しました。自分たちは彼女たちに日本でこんなにしてあげただろうか？唯一残念だったことは、自分があまりに英語が拙いために、これほどの感謝の気持ちをうまく伝えられなかったのではないかということです。あれだけの短期間にも関わらず、彼女たちは僕の中で人生で最も記憶に残る人々になりました。僕は特にハワイ大学学生の Jenn が「私はハワイ大学の学生の中で一番良い思い出を持ってるって自慢できる。それはあなたたちとこうやって楽しく日々を過ごせたことよ。」という内容のことを言ってくれたのが忘れられません。言葉の壁を超えてたくさんの感動をもらいました。

同時に忘れてはならないのが、共にこのワークショップ中ハワイで過ごし、昼夜を共にした大阪医科大学の学生仲間との絆です。彼らなしでは僕はこのワークショップを無事乗り越えることはできなかったと断言できますし、彼らと共に試行錯誤しながら問題解決をし、旅を楽しみ、そして騒いだことは一生忘れないでしょう。

最後に、今回のハワイワークショップ参加の機会を与えてくださった中山国際医学医療交流センターならびに PA 会の方々にお礼申し上げたいと思います。こうした活動を毎年行ってくださり、実際に何人もが充実した実習を行って成長して帰ってきているからこそ安心できた部分もありますし、PA 会からの奨学金が無ければ今回の海外留学は実現しなかったと思います。また、ハワイでご指導いただきました Dr.Sakai、Dr.Omori、その他現地の教員、学生の方々に心から感謝いたします。今回得たかけがえのない経験は、将来に大きな変化を与えると信じております。本当にありがとうございました。

**ハワイ大学のワークショップに参加して**

（竹宮 由美さん）（5 年生）

私がハワイのワークショップに応募しようと思ったきっかけは、外国の人とコミュニケーションを取ってみたかったこと、先にワークショップに行った友人に勧められたこと、外国の医学部や病院について興味があったことです。学生生活の間に一回は留学をしてみたかったこともあり、今回参加させていただきました。

参加することが決まって、今まで苦手で出来るだけ避けて通ってきた英語を必死に勉強しました。勉強会に参加して、疾患名、問診の仕方、身体診察の仕方などを英語で学ぶことにより、英語の単語を知るだけでなく今までの知識を整理することも出来ました

実際のワークショップでは PBL や問診、禁煙外来などの授業を受けました。一番印象に残ったことは注射を打ったことでした。皮下注射も筋肉注射もしました。なかなか出来ない体験でした。授業の間にはハイキングやパーティがあり現地の学生や日本から来ている他の大学の人々と交流する機会が設けられていました。意識の高い人が多くて、モチベーションが高まりました。

ハワイ大学の学生さんにはいろんなところに連れて行ってもらったり、最後の日にはホームパーティーを開いてもらったりして大変親切にしていただきました。実は私がハワイに行って一番楽しかったことはハワイ大学の学生さんと一緒に過ごした時間だったかもしれません。素敵な出会いでした。

最後に、このような機会を与えてくださった先生方や中山国際医学医療交流センターに感謝の意を申し上げます。

## ②. 中国医科大学
## （中国医科大学臨床実習派遣　学生２名）

国際交流推進の一環の中国医科大学との交流協定に基づいて行われる臨床実習に、平成 25 年 4 月 1 日から 4 月 26 日まで、藤岡健人君、濱口真里さんの２名が参加しました。以下に各参加者の研修報告を掲載しています。

### 中国医科大学附属病院での実習を終えて

（藤岡 健人君）（派遣時 6 年生）

今回の 4 週間の実習は神経内科、循環器内科、胸部心臓外科、一般外科（普通外科）の 4 つの科を軸に皮膚科、救急、ICU など多くの科を見学させて頂きました。

それぞれ細かく紹介するのではなく大きく 3 つの印象的な事について記させて頂きたいと思います。

1 つ目は医師と患者の距離です。

中国では患者さんは医師にダイレクトに思ったことを話します。病気についてわからない事があれば何でも率直に質問します。医師に聞くという事のハードルが低く、それが、総合的に医療の質を高めることに貢献しているように思えました。日本でも患者さんから医師に疑問があれば簡単に質問できるような環境を整えることが医療レベルを向上させるということを改めて実感しました。

そして 2 つ目ですが、医学生のモチベーションの高さです。中国医科大学の学生は 5 年生から担当患者を数人受け持ちます。毎日の回診、検査オーダー、薬の処方など、まずは学生が行い、上級医に相談するといった具合です。医師に準じて働き、緊張感の中で実習を行っています。知識が深く自分の知識の浅さに愕然としました。「どうして？」「なぜ？」を大事にしていて、わからないことは徹底的に調べる姿勢を目にしました。将来についても何がしたいのか、どんな医師になりたいのかといったプランを明確に持っていて、それに向かって具体的に努力しているように感じました。中国医科大学の学生と 10 年後に再会する約束をしました。その時に胸を張って日本の医療を語れるようにこれからはしっかりとしたビジョンを持ち精進していきます。

3 つ目は、今回の実習で私は神経内科の外来で脊髄小脳変性症や Duhenne 型筋ジストロフィーの患者さんを初めてお目にかかることができました。有病率のとても低い病気ですが中国医科大学というとても大規模な中心病院で実習をさせて頂いたからこそ実現したのだと思います。机に向かって勉強するよりはるかに印象強く、症状や診察方法はとても心に残っています。しかし更に私の印象に残ったのは先生の患者さんに対する接し方でした。外来の診察を終えて、先生は私たちに次のようにおっしゃいました。「医者というものは火で患者さんは氷です。医者は病気をもった氷である患

者さんにとって明かりを灯す人であり、且つ患者さんを温める人でなければなりません。」とても当たり前のようですが深く考えると、そう簡単に実現できるものではないと思いますが心の中に常に置いておきたいとおもいました

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただいた中国医科大学の先生方、河野教授、花房教授、米田教授、中山国際医学交流センターの方々、そして本当に仲良くしていただいた中国医科大学の学生さん。本当にありがとうございました。

**中国医科大学における臨床実習を終えて**

（濱口 真里さん）（派遣時 6 年生）

この度、4 月 1 日から 4 月 26 日の 1 ヵ月間を中国医科大学で臨床実習させていただきました。中国の瀋陽にある中国医科大学病院は 3000 床を超えるベッド数と患者さんを抱えている病院での実習は日本の病院では目にすることのできない多くの疾患に出会うことのできるものでありました。中国医科大学には、中国語で行われるクラスだけではなく、日本語クラスや英語クラスといったものもあり、中国医科大学で学ぶ学生は母国語の中国語だけでなく、日本語や英語を堪能に話す方が多く、コミュニケーション能力という面ではかなり向上した 1 ヵ月だったと感じています。

さて、1 ヵ月という短い期間ではありましたが、神経内科・循環器内科・心臓外科・消化器外科の 4 つの診療科を 1 週間ずつ見学させていただくことが出来、中国では 5 年生から 7 年生が病院内で臨床実習を行っています。6、7 年生になると担当患者の管理に加え、当直などが増え、病棟全体の管理を任されるようになります。5 年生はその 6 年生や 7 年生に付き、1～2 人の患者を入院から退院まで管理することとなっています。今回は、その 5 年生の方々と一緒に実習に参加させていただきました。実習内容は大阪医科大学のクリニカル・クラークシップとに似ており、指導医の傍について診察・手技を見学したり、実際に診察したりというものでした。

神経内科では、まず日本人学生の上村さんをご紹介いただき、神経内科の病棟を案内していただきました。神経内科では毎日教授回診が行われており、月曜日は主任教授の何先生が回診をされます。何先生の回診は他のどこの診療科でも見ることのできないくらい患者さんの笑顔、笑い声に触れることができるもので、まだまだ言語が理解できない私にも患者さんが何を訴えているのか、先生が何を話しているのかがわかるようなコミュニケーションでした。何先生からは学ぶことはたくさんありましたが、最も印象に残っていることは、患者と医師との関係でした。何先生は「患者は氷であり、医師はひ（日・火）である」と何度も教えてくださいました。氷のように閉ざした患者の心を、医師は火のようにあたため、また、日のように明るく照らすのだ、と教えてくださいました。

また、水曜日に行われる特別外来では、筋ジストロフィー、脊髄小脳変性症などの患者さんの診察を見学させていただきました。特別外来というのは、一般外来が 5 元（約 80 円）なのに対して、400 元（約 6400 円）という金額を支払って患者さんが主任教授指名で診察を受ける外来のことで、医師を指名できるだけでなく、一般の外来に比べて時間もたっぷり取って診察してもらえるというメリットがあります。この外来では何先生が筋ジストロフィーの分類について教科書を用いて講義してくださり、実際の症例を目の前に、説明を聞くことで、頭の中がきっちり整理されたと感じています。

神経内科ではその他、朝の 7 時 40 分からのカンファレンスが毎日行われており、そこでは前日の夕方からの患者の管理についての報告が主に行われています。ここでは、当直を行った学生や、学生の班長が報告をするとともに、その場での対応で疑問に思ったことなども質問していました。今まで、神経内科＝神経診察所見、というイメージが強かった私ですが、今回の実習で神経疾患における治療方針の立て方の多くを学べたと感じました。

2 週目の循環器内科では、まず 6 年生と 5 年生の実習生に病棟を案内していただき、その後、王先生という女性の先生につかせていただきました。王先生は中国医科大学の日本語クラスの授業も受け持たれており、日本語がとてもお上手で、私達留学生にも分かりやすく説明をしてくださいました。特に病棟で行われる王先生の回診では虚血性心疾患に関する投薬の質問などを投げかけてくださり、それを次の日までに調べ先生に解説していただきましたので、循環器内科疾患で用いる薬剤をしっかり整理することができました。また、外来診察も見学させていただいたのですが、中国の東北地方（中国医科大学がある少し寒い地方）では、食生活のせいか、高血圧の患者が多く、その治療に漢方なども用いられていました。日本とは違い、1 人の医師に対して 50 人の外来患者を半日で診察をするという数の多さに圧倒されたのがとても印象に残っています。ただ、人数が多いので多くの心電図の読ませていただくことができ、練習になりました。

3 週目は心臓外科です。中国の外科は日本とは異なり、毎日何件もの手術をこなしていきます。手術の流れは、まず教授や助教授が手術室に入り、開胸を行い、手術半ばに主任教授が入り、閉胸はレジデントが行うというものでした。心臓外科では、于洋先生にお世話になりました。于先生は現在チーフレジデントを任されており、24 時間体制で病棟の管理と手術のスケジュールの管理を行っておられ、実習生の指導も任されています。期間中は、心疾患の患者の聴診や心電図の読み方を教えていただくとともに、朝の 7 時半からのカンファレンスに続き手術を見学することが中心でした。手術室内の様子は大阪医科大学のものと似ていましたが、術衣などがディスポーザルではないことに驚きました。中国医科大学では 1 日に 1 室約 3～4 件の手術が行われており、Bentall 手術、Wheet 手術、バイパス手術、弁置換手術を見学させていただき、また透析用のシャント形成術には実際清潔になり手術に参加させていただくことで、学問に対するモチベーションがすごく上がりました。

4 週目の消化器外科では鐘先生につかせていただきました。消化器外科というくくりではなく、実際は普通外科というくくりの科で、思っていた以上にさまざまな疾患を目にすることができました。中でも印象に残っているのが、腹壁瘢痕ヘルニアの患者さんが多かったことです。稀な疾患であるというイメージが一転しました。中国ではよく起こる疾患だそうで、手術の手技的なものは他のものに比べ短時間で終わることができることから、朝一番の手術にこの腹壁瘢痕ヘルニアの手術が行われていることが多かったです。普通外科で感じたことは、手術室でのオペ看護師や麻酔医が医師との

コミュニケーションをよくとっていたことです。オペ看護師がなぜそのような手技を行うのかなどの質問を投げかけたりしている場面も見られ、チーム医療をかいまみることができました。多くの手術を見学させていただく一方、外来を見学させていただくこともできました。中国医科大学は大きく患者数も多いので、午前中にオーダーした検査はその日に行うことが基本で、午後はその結果を再び医師に見せにくるのが外来の一般的な流れでした。検査がその日に行え、必要ならその日に入院できるシステムを目の当たりにし、規模の大きさを実感したのが印象的でした。

はじめはどこに行っても日本の医療の方が発達しているはずだ、というイメージを持っていましたが、実際に現場に入ってみると、中国で行われている医療はほぼ日本と酷似していることがわかりました。しかし、大きな相違点は保険制度です。中国で医療を受ける人々は大半が自己負担となるため、自分が支払える分の中での治療しか受けられず、また医師たちもその中での最善の治療を計画していく、これが日本との大きな差であると感じました。さらに、日本と全く異なるのが人口の数です。患者の人数が多いため、現場はどの診療科でも日本の救急部ICUのように感じられました。医師の処置能力の早さ、判断の速さは本当に感心するばかりです。このように相違点はいくつか感じられたものの手技や治療方針の基本は日本とほぼ同じであり、また日本が学ぶべき部分も存在すると私なりに感じた点もありました。今後も日本の医療も欧米に追いつけ追い越せの形にはなるのだとは思いますが、アジアを視点にお互いの良い点を出し合うことでアジア医療は大きく一歩前進するように感じています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった、中国医科大学の先生方、中国国際交流センターの皆様、花房先生をはじめとする中山国際交流センターの皆様、そしてあたたかく受け入れて毎日私のお世話をしてくれた中国医科大学の学生の皆さん、すべての方々に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

**（中国医科大学選択臨床研修受入 学生２名 ）**

中国医科大学より平成 26 年1月 14 日から 2 月 7 日まで Yu Hai 君、Chen Yan さんが交流協定に基づき海外選択臨床実習の一環として本学および三島救命救急センターにて研修を行いました。日本語に堪能な二人は休みには図書館で参考書を借 りて読むなどとても勉強熱心で、研修でお世話になった先生方もとても感心されていました。以下に 2 人の研修感想文を掲載しています。

花房センター長と面談（交流センターにて）

＜抄訳＞

**大阪医科大学研修レポート (2014.1.14~2014.2.7)**

Chen Yan（張燕）

中国医科大学 7 年生

大阪医科大学への留学があまりに忘れがたいので、これは素晴らしい「旅」と形容したほうが良いでしょう。大医の学生さんたちとはすぐ友達になれました。皆さん明るくて社交的、いつも元気いっぱいで私達を常にサポートしてくれました。ほとんどの学生さんに海外経験があると聞いて、やはり海外経験というものは人に自信をつけさせたり親切心を養ったりするものだと思い、自分もそうなりたいなと思いました。研修担当の先生方、教授の先生方までお忙しいのに私達にとても辛抱強くいろいろと教えて下さり、これは来日前には全く期待していなかった予想外のうれしい出来事でした。先生方の患者さんや学生に対する態度は本当に忍耐強く、とても印象に残りました。

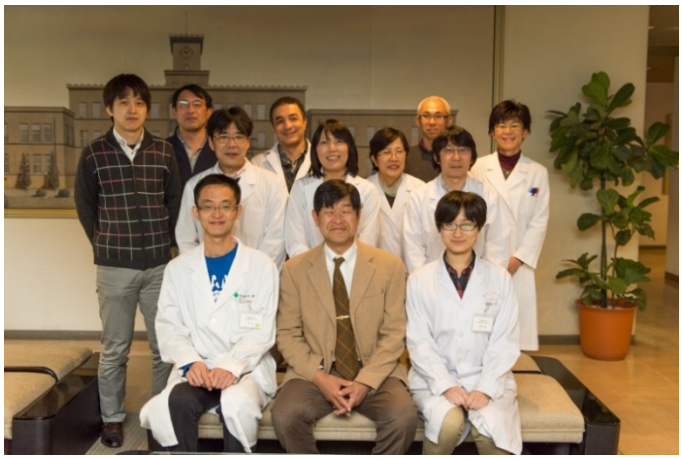
毎日違う教室や診療科を回る研修は日本の医療システムがよくわかりとても良かったです。初日に産婦人科に行った時、中国ではまだ臨床実習が始まったばかりだったので間近で手術を見ること自体初めてなのに、なんと名前しか聞いたことのない珍しい症例である子宮の横紋筋肉腫の手術をいきなり見学できるという信じられない出来事がありました。

先生方は手術の技術も素晴らしかったですが、とにかく豊富な知識を全て私達に伝えようとしてくださって、私達が混乱してわからなくなると理解できるようにあれこれとできることは全てしてくださいました。そんな出来事があってますます医学への興味が湧いてきたと思います。将来患者さんと接したり勉強したりしている時にこの事を思い出しては先生方のようになりたいと思い返すと思います。

大阪医科大学のシュミュレーションセンターは大好きな場所でした。腰椎穿刺や心臓超音波検査などたくさん練習できて、学ぶことも多かったですし楽しかったです。シュミュレーションセンターの林道廣先生は私達に期待をかけてくださって、そのお言葉には励まされました。

病院実習の他にも日本の文化を知る機会がたくさん研修中にはありました。茶道や剣道、花房教授とニューイングランドジャーナルを読む抄読会、京都観光などなど。抹茶は最初、苦く感じましたが毎週飲んでいるうちに大好きになってしまいました。剣道は日本の精神を表していると思いました。部員の方々に素晴らしい実技を見せてもらった時、練習こそが力強い技術を磨くのだなあと実感しました。

今回の留学でお世話になった全ての皆様、本当にありがとうございました。



**Osaka Medical College Reflection Essay(2014.1.14~2014.2.7)**

Chen Yan
7th year student
China Medical University

Not until I sit in my chair and write down these words have I realized that I've go back to China. I can still feel the passion and warmth from OMC's students and teachers.

We start the amazing journey (yes, I prefer to call it a journey because of its interesting and memorable) at January. It's kind of difficult for students like us who never been to other country before to adapt to the new environment. However, we fitted in soon with the help of Nakayama International Center and all the lovely friendly students. During the days I stayed in Japan, I felt the students of OMC are all very outgoing and friendly. They seem to be full of energy all the time and always ready to help us foreign students. And I heard that most of the students had been to other countries. So I think international experience really helps students being more confident and helpful, and I hope I could be the same. What's more, besides the students, all the Japanese here are friendly to us. Busy as they are, from the person in charge of us to the doctors, even professors are so patient to us and taught us a lot. Truly I didn't expect that before I came here. So it's much better than I thought, and I really appreciated it.

We came to OMC for visiting and learning, so what about the hospital we stay for nearly four weeks?

I have to say, it's really a good clinical rotation program, for we could go to different department everyday. In this way, we're able to get to know Japan's medical information better. We went to the OBGY for the first day of OMC. And you can never imagine how I feel that day. It is the first time that I've got the chance to observe the operation so close (we just started our rotation of our school before we came to Japan).It's a rare case called Uterine Rhabdomyosarcoma, a name I only hear about before, and you won't believe I've observe the operation already. In OMC's hospital, what impressed me the most is doctors' attitudes towards patients and students . They are maybe the most patient doctors I have ever seen before. And the way they treat with the surgery is also admirable. In addition, the doctors are all very knowledgeable and would like to teach us all they know. When we got confused about some questions, the doctors try as hard as they could to help us figure it out. And because of that, I get more and more interested in medicine. In the future days, when I am studying or seeing the patients, I will think of the doctors I had seen here, and try to be a good doctor like them. And my favorite place of OMC is the Simulation Room. We practice a lot there, for example lumbar puncture, cardiac ultrasonography and so on. Not only do we get a lot of fun there but we also learn a lot.

Besides the wonderful rotation experience in OMC hospital, OMC also offers us great chances to get to know Japan better. For example, tea ceremony, Kendo club, Journal Club, Kyoto sightseeing and so on. We drink matcha nearly every week. At first, it tasted bitter. But now I just fall in love with it. As for Kendo, I think it represent some kind of Japan's spirit, powerful and strong. The members of the Kendo club made an excellent show for us. It is when I tried by myself that I realized Practice Makes Perfect. As for the Journal Club, it's a club that teach students reading

New England Journal. It is in charged by Prof. Hanafusa. It helps improve both English and medical knowledge.

Last but not the least, I would like to express my gratitude to everyone in OMC. Dr. Michihiro Hayashi is a very charming doctor, he placed his hope on us and encouraged us to learn more. I'm really inspired by him. And all the members of Nakayama International Center worth my sincere respect. Thank you very much, really.

＜抄訳＞

**友情の架け橋となった研修**

Yu Hai

中国医科大学 7 年生

時間が飛ぶように過ぎた大阪医科大学での研修 4 週間。お世話になった全ての方々に素敵な時間をありがとうございましたと伝えたいです。

外国での滞在体験がないので環境になじむのに時間がかかると留学前は思っていました。しかしデパートでは自分が売っているものと全然関係ないのにレジカウンターに案内してくれたり、道行く人に道を尋ねたら地図を親切に描いてくれたり、色々なことが思ったより大変ではありませんでした。食べ物に関しては正直なところ初めは慣れませんでしたがだんだん慣れて、サシミが大好きになりました。

研修中には大学と病院、両方で研修をしました。大学では実験をする機会があって、免疫組織化学は既に中国の母校で勉強したものでしたが、時間が短縮出来る新しい手順を知ることが出来てとても面白かったです。病院では腹腔鏡を使った幽門側胃切除などいくつか手術を見学しました。消化器外科の先生方にどうやって腹腔鏡手術の技術を磨いたのですかと尋ねたら、患者さんを手術する前にシミュレーションセンターで何回も何回も練習するので本番の時には技術が身についているんだとおっしゃっていました。大学でも病院でも先生方は質問に詳しく答えてくださいました。

シミュレーションセンターで練習する機会があって、心肺機能蘇生（CPR），腰椎穿刺、心拍聴診などを練習しました。一番わくわくしたのは腹腔鏡と胃内視鏡です。見学の時はとても簡単に見えたのにモニターを通じてする腹腔鏡操作は難しくて、でも先生が言われたように、練習してこそ外科技術は磨かれるのでしょう。胃内視鏡はゲームモードがあって飽きることなく練習出来ました。

しかし、留学で何を一番学びましたかと聞かれたらたら、「人間味のある優しさ」と答えるでしょう。外来では先生方は患者さんを病人扱いせず友人のように接していました。患者さんの事を思う気持ちが信頼関係を生み、その結果医者として必要な情報を得ることにつながるのだと思いました。同じ医療知識や技術を持っていても患者さんを第一に考える医師は尊敬を集めると思います。僕も勉強を通して自分の人間性を磨いて行こうと思いました。

この留学で多くの知識や技術のみならず新しい考え方を学んだと思います。僕は日本の人と髪の色も肌の色も同じで、外国にいる違和感を感じませんでした。お別れパーティーで消化器外科の林道廣先生がおっしゃっていたように、研修は終わったけれど友情はまだこれから始まったばかりです。

**A friendship trip**

Yu Hai

7th year student

China Medical University

Time flies. Now I have finished my four weeks study in Osaka Medical College. First I want to say thank you to all the staff in Nakayama international Center, the doctors and the students in Osaka Medical College.Thank you very much for giving me a wonderful tine in Japan.

Before I go to Japan this time, I did not have any experience of staying oversea, which means I need a period of time to adapt the environment, at least I have thought so. After arriving in Japan I found that living in Japan was not as tough as I thought. On the contrary, it was very easy. The shop assistants took me to counter even though she had noting to do with the goods that this counter selling; Strangers I met on the road drew me a map in order that I could reached my destination smoothly. As to the food, actually I was not used to some of the food at first. But gradually I came to like them, and I like the sashimi most.

During the four weeks study in Osaka Medical College, I have visited both the school and the hospital. In the school I observed some experiments and did some of them by myself, such as immunohistochemistry. Although I have had an experience of

finishing it, but a new time-saving protocol made me excited. When I studied in the hospital, I observed some surgeries including a laparoscopy assisted distal gastrectomy.When I talking with the doctors of General and Gastroenterological Surgery, I asked how could they become skilled in laparoscopy assisted surgery, they said they have practiced times and times at the training center before they operated on the patients, and what they faced with are alive person, they must have superb technology. Both the teachers in the school and in the hospital explained my questions in detail.

I also had a chance to train myself in the training center. At the training center, I learn CPR, lumbar puncture, heart sound auscultation. What made me excited was the practice of laparoscopy and gastroscope. When observed the laparoscopy assisted surgery, I thought it was very easy. But when I did it on my own, I found it was very difficult to operate through the monitor. But just as the doctor said, the laparoscopy model practice at the training center made hin a better surgeon. Refer to the gastroscope model,it has a game mode, I could train myself without any boring.

If you ask me what the exchange program taught me most, I think it is humanity. When I was studying in the outpatient clinic room, doctors there took patients as their friends not as people who were ill. So I think doctors who pay more attention to the patients, who give more care to the patients can get the information that they need and get patients' trust easily. Doctors who have equal knowledge and skills will be spoken highly of if they put the patient the first whenever it is. As a result, during my pursing medicine, I will pay more attention to build my humanity.

Through this exchange program, I really acquired a lot, not only the knowledge and skills,but also the ideas. The doctors ,the teachers and the students,all of them were very friendly to me. I have the same black hair, yellow skin with Japanese which make me fell not in oversea. Just as Dr. Hayashi said at the farewell party, the four weeks study has finished,but the friendship just begins.

**（中国医科大学短期臨床実習派遣　学生１名）**

平成 26 年 3 月 3 日から 3 月 14 日まで 医学部 3 回生の後藤祐子さんが中国医科大学での短期臨床実習に参加しました。

以下に後藤さんの感想文を掲載しています。

**中国医科大学における実習感想文**

大阪医科大学4回生　後藤祐子

2014 年 3 月 1 日から 3 月 14 日までの約2週間、中国医科大学で臨床実習させていただいた。2 週間のうち、神経内科を3日、胸部外科を2日、循環器内科を3日、小児科を2日見学させていただいた。それぞれの科では、教授回診、外来、手術などを見学させていただいた。

外来は、中国では教授レベルのみが行い、一般の医師は行わないそうだ。その補助として、大学の6年生と7年生の学生が補助につき、教授が出した薬のオーダーなどを電子カルテに打ち込んだり、患者のもってきた MRI 画像などを準備したりしていた。外来は日本以上に混雑しており、一人あたりたいてい5分くらいであった。さらに患者は、大学病院とのことで、地方から来る患者も多いため、一人の患者に対して家族が 3 人も4人も付いて来ているうえ、患者は呼ばれもしないうちから次から次へとどんどん入ってくるため、一つの診察室に 20 人以上がいることもあり、プライバシーの問題や、医師も一人の患者に集中して診察できないのではないかと思われた。また、中国では保険の種類がいくつかあるため、人によっては、MRI や CT を全て自己負担しなければいけないこともあるため、MRI や CT を行った後に異常がないことがわかると、MRI や CT が無駄だったと言って、医者に MRI や CT の代金を支払うように請求することもあるため、容易に MRI や CT を行うことはできないとのことであった。

教授回診では、やはり日本のように、一人の教授に多くの医者や学生がついてまわり、担当医や担当学生が教授に状況を説明し、それについて教授が助言を与えたり、患者や家族からの訴えに応えたりしていた。

心臓血管外科では、心臓冠動脈のバイパス手術を見学した。中国では6年生、7年生がバイパス手術の元となる血管を取り出すなど、積極的に手術に参加しているのが、大変羨ましく思った。

全体を通して思ったことは、確かに中国医科大学には英語や日本語を話す医師や学生がいるものの、常にそのような医師について見学できるわけではなく、たとえそのような機会があっても医学的な情報の意思疎通は難しかった。よって、ほとんどの時間を説明はなく、本当に見学するだけに留まったことは、大変残念であった。

中国では、主に2月に大阪医科大学に実習に来られていた陳さんとゆうさんに大変親切にして頂いた。食堂やホテルの場所、スーパーの場所を教えていただいたり、学校が終わった後には、買い物、夕食などに一緒に連れて行って頂いた。また、医療・医療以外の様々な話を聞くことができた。例えば、中国では医師は日本のようには尊敬されておらず、給料もそこまで高くないという話や、食事に行った際にはキッチンの仕事や芸術家の仕事は社会的に低くみ

られるとの話も聞き、日本との違いを感じた。お世話になった先生や二人には、滞在中大変お世話になり、感謝している。

### ③. マヒドン大学
### （タイ・マヒドン大学附属シリラート病院選択臨床実習派遣　学生 3 名）

国際交流推進の一環のタイ・マヒドン大学附属シリラート病院との交流協定に基づいて行われる臨床実習に平成 25 年 4 月 1 日から 4 月 26 日まで、城 玲央奈さん、東堂 まりえさん、松尾 知彦君の 3 名が参加しました。エイズ患者の多さや外傷患者層の違いから、国の抱えている社会問題を医学医療を通じて感じた実習でした、との感想も述べられています。

**マヒドン大学シリラート病院での実習を終えて**

（城 玲央奈さん）（派遣時 6 年生）

この度、タイのマヒドン大学シリラート病院にて 2013 年 4 月 1 日から 26 日まで実習させていただきました。

シリラート病院はラーマ 5 世によって 125 年前に創立されたタイで最も古い歴史を持つ病院です。タイ国内で最も大きい病院の一つであり、病床数は 2000 床を越え、広大な敷地内をたくさんの医療スタッフが行き来し非常に活気あふれています。

私は HIV や結核などタイで common な感染症について学びたいと考え、実習前半は感染症内科を選択しました。日本での実習中に HIV の症例を見たことが一度もなかったため、まず回診や外来で目にする HIV 感染患者の多さに驚きました。ドクターの話によるとタイでは性教育が乏しく、避妊や STD 予防の知識は人々に行き届いていないのが現実で、そのため HIV 感染のほとんどは性感染によるものだそうです。しかも HIV についての知識がないため、日和見感染などで症状が出現して病院に行って初めて HIV に感染していることが判明するケースがほとんどで、診断時の CD4 の数が一桁だったという患者もたくさん目にします。感染したことを知らない患者から感染が広がるという悪循環に悩まされるタイの実情に触れ、予防のための性教育と早期発見の大切さを実感しました。

実習後半は脳神経外科を選択しました。シリラート病院はタイ国内で最新の治療を提供する有名病院であるため、扱う症例は他の病院では治療できずにこちらに紹介されてきた腫瘍、AVM などの複雑な症例がほとんどです。脳神経外科専用のオペ室 4 部屋で毎日オペが行われており、豊富な症例数のなかで日本での実習では見たことのない様々な症例を見ることができました。

また、外科のドクターは日本に留学経験のある方が多いらしく、今回私の指導を担当してくださったドクターも 2 年間の日本留学から帰ってきたばかりの方でした。留学中に日本人は自分にとても良くしてくれたから、と多忙にも関わらずつきっきりで非常に親切かつ丁寧に指導して下さり、実習以外でも食事や観光に連れて行って下さいました。他にも留学・観光で日本を訪れたことがあるタイ人のほとんどが日本人はとても親切で正直と日本に対して好印象を抱いており、私に対しても困っていることはないかといつも気遣い、助けてくれました。今回の経験から、私が将来留学生を受け入れる立場になったとき、彼らに対して精一杯のことをするのが私の使命であり、その結果彼らが私と同じように感じてくれればそれが真の国際交流となると感じました。

最後に、今回このような貴重な留学の機会をくださった花房教授、米田教授をはじめとする中山センターの皆様、そして実習中お世話になったシリラート病院の感染症内科・脳神経外科の先生方、International Relations のチラユ教授とスタッフの皆様に深く御礼申し上げます。そして、exchange program というかたちでこの留学が実現しているのは、マヒドン大学から留学生が大阪医科大学に来校した際に彼らを快く受け入れてくださる各診療科の先生方の存在があるからだと思います。先生方のご協力に深く感謝します。本当にありがとうございました。

## 研修レポート

6回生　東堂まりえ

私は 4 月 1 日から 26 日までの 4 週間、タイのシリラー病院にて研修をさせていただきました。実習期間中、文化や社会の違いや医療についていろいろな発見があり、多くのことを学ばせていただきました。

今回の実習で最も印象的だったことは、タイでは学生達の教育が非常に臨床意義の高いことです。

学生達はレジデントとともに診察、診断を行い、必要な検査や鑑別診断の考え方を学んで行きます。自分たちでカルテを書き、指導医から治療薬の選択、治療方針を立てる上で考慮しなければならないことは何なのか、緊急性を示唆する症状や背景はいったい何なのかを毎日学び、吸収していました。

また、小児科を見学中に参加させていただいた勉強会では、学生たちが与えられたケースに対して診断・検査・治療を提案していく中、指導医の先生やレジデントの方々はメリット・デメリットや判断のポイントや理由を一つ一つアドバイスされており、見学していても非常に勉強になりました。

このように臨床意義の高い教育、また医師、レジデント、学生が連携し合った教育システムは、本当に価値のある物だと思います。

他にも、いろいろな発見がありました。たとえば、医療の内容にも母校とは違ったものがあり、すばらしい経験をさせていただきました。

小児科には Adolescent Clinic と呼ばれる外来がありました。ここは 10 代で妊娠し、子供を産んだ女性とその子供のためのクリニックです。

10 代で出産した女性の中には、育児や生活のために学校をやめ、そのために十分な教育を受けられず、社会的にも不利になってしまう人がいます。この問題に対し、子供の健康を確認するのと同時に、母親にも自身の体を守るということの大切さと教育を受けていくことの意義を熱く伝える先生の姿に大変心が打たれました。

また、Continuous clinic では、発達障害や先天的な機能異常など、長期的なフォローの必要な子供とその家族のために必ず 30 分以上、必要であれば 1 時間でも話を聞きます。

子供の成長を見守り、両親には子供達との接し方を具体的に（たとえば叱り方、体を使ったスキンシップの取り方など）伝えて行く様子を見学させていただきました。

このような外来が日本にもあればいいのに、そして私も先生方のように患者の体にも心にも寄り添えるような医療を志していきたいと思いました。

また技術、施設や物資の面での差、特に感染症科を研修させていただいていた期間には衛生面での意識の大きな差に非常に愕然としました。自分自身の恵まれた環境と、シリラート病院での教育、医療のすばらしさを強く感じました。これから医師を目指す最後の一年を過ごすに当たり、まだまだ自分自身見直し、そして改善していける点を見つけることができたと思います。

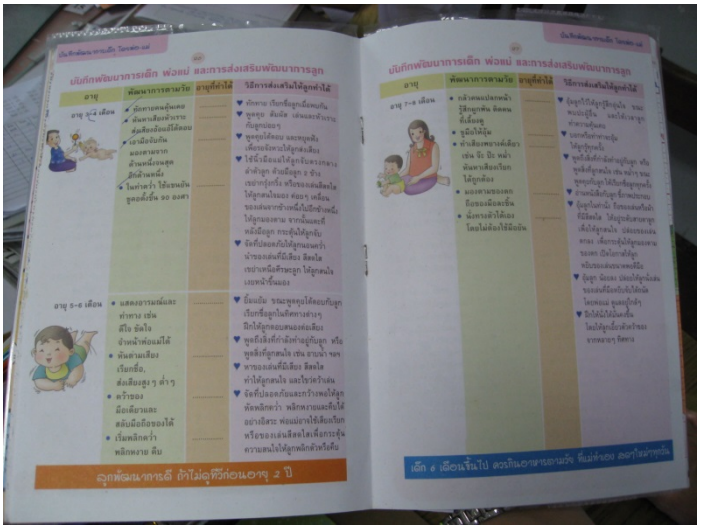
この実習期間中には、シリラー病院の学生や先生方、他国から来ていた同じ選択実習の学生の方々とも交流し、ご飯を連れて行ってくださったり、休日や放課後に行動を共にして、多くの友人を作ることができました。

文化の壁があっても交流を深め、共に楽しい時間を過ごせて本当に充実した4週間でした。

このようなすばらしい機会をくださった花房先生、米田先生、ご支援くださった中山国際センター、PA階の皆様に心より感謝申し上げます。またタイにて支えてくださったシリラー病院の学生の方々、スタッフ、先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、暖かいメッセージをくれた友人と、そして何より家族にもお礼を伝えたいと思います。

本当にありがとうございました。



## マヒドン大学シリラート病院での臨床実習レポート

6回生　松尾知彦

今回私は、4月の4週間マヒドン大学シリラート病院で実習させていただきました。

タイと日本の医療の違いは、国が違えば常識も違うというほどに異なっていて同じ西洋医学をバックグラウンドに働いていてもここまで違うのかという驚きがありました。特に驚いたのは、どこにいても誰でも安価に同じような治療が受けられる日本と異なり、タイでは同じ市内であっても払える額によって受けられる医療の質が異なるという事です。

また医師達も、普段はリラックスしているように見えても、本気で仕事に取り組む時には目つきががらっと変わり、いざオペに臨むというときには真剣に話し合っているという姿が見られました。英語での手術方式の検討に参加しようとしてもそれはかなり難しい事ではありましたが、執刀医の下には6回生から4回生までがついていて、一つ上の学年が下の学年に教えるという形で知識が伝わっていく。それは、大阪医科大学が PBL で真の意味で実践したかったはずの、自ら学び、人に教える事でその知識を確かなものにしていくという姿が垣間見えました。PBL では同じような形式の勉強が繰り返されることで、人によってはマンネリと感じる事もあっただろうと思います。しかし、実際の患者を目の前にしての勉強はその繰り返しを毎回新鮮なものにかえます。日本での病棟実習では実際の仕事に追われている医師には基礎的な質問はしにくいと

思われますが、タイでは質問をする相手は一つあるいは二つ上の先輩であり、聞きやすそうに思えました。また、日本での標準的な治療について、ここでもをやっているのかと質問した時には、次々に上の先生に確認してくれて自分も勉強になったと笑う。その姿にとても新鮮な気持ちになりました。

病院内では、治療のチームの教授と学生に教える担当の教授の二種類の教授がいます。日本での教授が教室に一人というのは、学生へのケアや外来、手術の事を考えると却って不効率じゃないかと言われたときには、なるほどある面ではその通りかもしれないと思いました。また、学生の質も高く、外来での診察やカンファレンスのタイ語と英語の同時通訳をこなす人や、私が参加したあるカンファランスでは、「彼以外に日本語で分かる人はこの中にはいないようだから、英語で話すよ」と切り替える先生がおりユーモアと語学力の高さにも驚きました。その背景には、マヒドン大学の学生のトップ数割しか、バンコク市内に残れず残りは地方で働かせられる一方、バンコクに残ったさらに数割は海外の好きなところで国費で数年間研修できるという事情があり、結果、マヒドン大学内には世界の医療のトップ水準を学び、語学力の高い先生が残るというシステムになっているようです。

私は、4週間のうち始めの二週間を CVT(CardioVascular team) 残りの二週間を形成外科で研修しました。どちらも上述したようにとても優秀な先生が多くとても勉強になりました。一方で、タイが抱える構造的な医療の偏りも垣間見えました。例えば、もちろん日本ではあり得ない事ですが、風邪を引いたときに医療保険下で、患者が払うのは数バーツ（10円程度）であり、MRI をとろうとすれば、数万バーツ（日本円で7万円ほど）かかってしまいます。結果、外来では Xp のみで診察が進んでゆきます。日本との違いは、患者が早期で疾病を指摘される事は少なく、教科書的なあるいは"古典的な"徴候をたよりに診断するという事です。その点も、マヒドン大学の学生が衝撃をうけ、また、医学を学ぼうという意識を強めるのだと思います。日本では国民としては幸運な事に（医学生にとってはある意味不幸な事に）日本では古典的な徴候があらわれない事が多く、外来ではある意味緊張感が薄れてしまうという事が往々にしてあったように思います。日本の授業においても是非、極端に進行してしまった患者の姿を見る機会があれば良いのにと思いました。

また、マヒドン大学の学生は5回生から救急外科の外来を週に何度か担当します。咬傷の消毒、デブリドマン、狂犬病ワクチンの注射、マルクなどをてきぱきとする姿は日本人の医学生たち（神戸大学の学生も同時期に実習に来ていました）にはとても衝撃的でした。もちろん自らの意志を示せばかなりの事を任せてもらえるし、タイ語で問診をするのは疲れるけれどとても興味深かったです。もちろん、すべての処置ができるように見える現地学生も頻繁にくる症例への対処法を経験的に知っているだけで、初めての場合は看護師におこられながら学んでいました。また、その事は慢性的な医療スタッフ不足に悩むタイの医療体制も背景にあり、日本の初期研修でみられるとても忙しい病院と背景は同じであろうと思われます。

タイでの実習についての現地スタッフについても記そうと思います。各医局には4、5人の秘書がおり、何か困った事があれば話せばたいていの場合なんとかしてもらえます。また、現地でのスタッフカードはあくまでゲストである事を示すのみで、オペ室などセキュリティが高いところは単独では入れません。ただ、オペ室に入らなければならないときは困った顔でうろうろしていれば助けてくれるほど親切でした。また、勉強したいという意思のある学生を無下に拒否する教授はいません。つまり、現地で、他の科の様子も見学したいのだという事を伝えればかなり融通を利かせてもらう事ができるようです。

末筆となりましたが、留学の機会を与えてくださった、花房教授や米田教授を始めとする大阪医科大学での留学を支援してくださっている皆様方と、マヒドン大学おいて真摯に対応してくださった、CVT、形成外科の先生、両医局のスタッフ、現地学生や留学生担当の現地スタッフの皆様に深い御礼を申し上げたいと思っております。ありがとうございました。

**（タイ・マヒドン大学選択臨床研修受入 学生４名）**

タイ・マヒドン大学より平成 26 年 2 月 10 日から 3 月 7 日まで Thanita　LIMSILI（Fon）さん、Jingswat SIRIKUNCHOAT（Jing）君、Pubet WEERANAWIN（Teoy）君、Witsarut NANTHASI（Jame）君の 4 名が交流協定に基づき海外選択臨床実習の一環として本学を初め三島救命救急センター、国立循環器病センター、大阪大学附属病院及び京都大学附属病院にて研修を行いました。以下に 4 人の研修感想文を掲載しています。

＜抄訳＞

**大阪医科大学での臨床実習を振り返って**

Thanita Limsiri (Fon)

（マヒドン大学・シリラート病院　4 年生）

大阪医科大学での4週間の研修はあまりにも早く終わってしまいました。研修で多くの診療科や教室を回るもので、毎日違う診療科でお世話になりました。

＜三島救命救急センター＞初日。日本の救急システムはとても興味深かったです。救急処置の病室も回りました。

＜整形外科＞患者さんが皆子供でした。子供の整形について多くの臨床知識が得られたと思います。

＜放射線科＞色々なCTスキャンやＸ線のフィルム、又機器を見て先生に解説して頂きました。外来も見学しましたが、外来のケースのほとんどが放射線療法や化学療法を受けた後の患者さんの体調問題でした。

＜消化器外科＞大腸がんや食道がん、すい臓がん、先天性胆道拡張などたくさんの外科症例を見学しました。各手術室で行われている手術について林先生は一つ一つ丁寧に教えて下さいました。

＜大阪大学医学部附属病院の高度救命救急センター＞緊急医療の仕組みを説明して頂いて患者搬送の緊急医療用ヘリを見せてもらいました。日本のテレビ番組に出てきたものと本当に同じでヘリの内部を見るだけでなくシートに座らせてもらえて感動しました。（注:ヘリは飛んでいません）

＜微生物学教室＞どんなふうに抗生物質を治療に使用しているか教授に見せていただきました。使われている有機微生物や耐性記録、ガイドラインがタイとは違うので、仕様も当然違いました。

＜輸血室＞同じ日の午後には輸血センターに行って、大阪医大での輸血のシステムと輸血後気をつけなくてはいけないよくある副作用について教わりました。

＜耳鼻咽喉科＞一番興味がありました。教授と病室を回診した時いろいろな症例を見させて頂いて勉強になりました。副鼻腔の排膿性膿瘍の手術を見た時にはレジデントの先生が手順を分かりやすく説明してくださったのでよくわかりました。

＜第一内科＞糖尿病外来と甲状腺外来を見学し、先生は実際に超音波測定の機器を私達に使わせてくださいました。今まで実際に機器を使ったことがなかったので一緒に研修していた同級生の甲状腺を超音波で見るのは面白かったです。

＜胸部外科＞先天性の心臓病の手術を見学しました。わたしは外からモニターで見学しましたがその手術では心肺バイパスをして心臓を停止させる必要があり、心臓が長時間止まったままの大手術には見ていて驚くばかりでした。無事に成功した翌日、手術後の患者さんのケアの様子も見ることが出来ました。

＜眼科＞外来でよくある症例について見学した後午後からは白内障の眼球内のレンズ移植の手術見学をしました。手術の手順をレジデントの先生が逐一説明してくださったので手順がよくわかりました。

＜産婦人科＞卵巣がんの手術の見学をはじめ、他にも興味深い症例について見学しました。

＜国立循環器病研究センター＞外来を見学した時には超音波で妊婦さんの診察するやり方を教えてもらいました。先天性心臓病を持つ赤ちゃんの超音波画像を沢山その日は見ました。

＜解剖学＞アルコール摂取した後の肝臓細胞のアポトーシスやオートファジーの研究について、ナビル先生にお話を聞きました。とても役に立ちそうな研究だったので肝臓へのダメージを防ぐためのアル中患者への治療法をそれを元になんとか編み出せないかなと考えたりしました。

＜循環器内科＞心周期と心拍について講義を受けてからシミュレーション機器で心音を聞きました。実際に機器を使うことによって理解が深まったと思います。

＜京都大学老人内科＞日本の医療保険の話などを聞きました。日本の老人人口の多さと更にその数がこれから増えるという話には驚きました。それでも政府はAED のような機器を多くの公共の場所に設置するなどして医療補助の工夫をしているのですね。高名な教授の先生方の老人学の研究についての講義も聴講しました。

＜消化器内科＞この日が実習最後の日。内視鏡のケースをたくさん見せていただきました。

研修最終日は卒業式にゲストで出席しました。謝恩会では研修でお世話になった先生方と又お会いしてお話することが出来て、先生方の優しさに又感動しました。

その他研修以外でもシミュレーションセンターで何回も手技の練習をしましたが、医学知識だけでなく文化理解や友情も深めた1ヶ月でした。このような機会を与えてくれた母校と大阪医科大学に感謝します。日本で得た医療知識を将来病気の治癒に役立てることの出来るようにこれからも頑張ります。

**Reflection Essay**

By Thanita Limsiri (Fon)

4th year student

Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University

Four weeks of exchange program in Osaka Medical College went so fast that I did not want it to end. I gained so many things while staying there during 10 February 2014 to 7 March 2014, not only medical experiences but also culture and friendship.

I arrived at Osaka on 8 March 2014. Miss Kimiko Matsumoto took us to our apartments with many conveniences and facilities. Also, our apartments are close to Osaka Medical College so we can walk to OMC taking only 10 minutes. After that, She guided us around Takatsuki city. It was a nice city and I felt really excited for the upcoming rotation in OMC the next day.

My rotation in OMC was arranged to go to different departments everyday so that I could have a chance to experience many departments. The first day I went to Mishima Emergency Critical Care Center. The emergency system in Japan was very interesting. I also had a chance to attend ward round in Critical Care Unit too.

The next day of my rotation was an orientation and hospital tour by Professor Toshiaki Hanafusa. He took us to see around hospital area and to meet many professors and also the director and the president of OMC. I received a very warm welcome from OMC professors at that day. Moreover, there was a welcome dinner for us hosted by Nakayama Center. It was my pleasure to be invited for an exotic dinner.

During my exchange program, I was rotated to many departments. In Orthopedic Surgery department, I observed out patient clinic. The patients were all in childhood age. Professor explained every case for us since we do not understand Japanese language. I gained a lot of clinical knowledge about Pediatric Orthopedic Surgery that day.

In Radiology department, I saw many patients' CT scan and X-ray films and professor explained about lesions in the films for me. He also took me to see many CT, MRI and radiotherapy machines. Also, I had a chance to observe out patient clinic in Radiotherapy division. Mostly, it was about patients' complications after receiving chemotherapy or radiotherapy.

In General and Gastrointestinal Surgery department. I observed many surgical cases such as colon cancer, esophageal cancer, pancreatic cancer and congenital biliary dilatation. Professor Michihiro Hayashi took us to every operation rooms and taught us a lot.

We were arranged to observe the Trauma and Acute Critical Care Center at Osaka University. There is a helicopter system for emergency patients. I was amazed since it was the same as I saw in 'Code Blue', Japanese Medical drama. The doctor at the center explained emergency system and showed us a real helicopter that was used to take patients to hospital. I was impressed to see inside the helicopter and to try sitting in the helicopter.

In Microbiology and Infectious Control department, I observed how professors used antibiotics for treating patients. It was different from Thailand because of the different organisms, antibiogram and guideline that they used. Afterward, I went to blood transfusion center. Professor taught us about blood transfusion system in OMC and common complications that we had to aware of after doing blood transfusion.

Then I was rotated to Otorhinolaryngology, which was my most favorite one. I observed ward round with professor. I could see many interesting cases there. In the afternoon, I observed the operation for draining abscess from paranasal sinus. The resident in the operation room explained the procedure for me so simplified that I could understand easily.

In diabetology, I observed out patient clinic and Thyroid clinic. In Thyroid clinic, professor taught me how to do thyroid ultrasound and let me do the ultrasound for my friend's thyroid. It was my first time doing it and that made me excited.

In cardiovascular surgery, there was a congenital heart disease case in the operation room. One of my friends had a chance to scrub in and observe closely in the operation field. I observed from the monitor. They had to do the cardiopulmonary bypass during the operation and stop the heart from beating. It was amazing to see the heart stop beating and the operation took a great amount of time. The operation went very well and we could observe post-operative care for this patient in the next day.

In ophthalmology, I observed many common cases in out patient clinic. After lunch, I observed intraocular lens implantation for cataract patient with resident. He explained the procedure in order so I could know what the surgeon was doing and understand the procedure clearly.

In Obstetrics and Gynecology department, I observed ovarian cancer surgery and other interesting cases.

I went to National Cerebral and Cardiovascular center for observing out patient clinic. In the clinic, the professor taught me how to do the ultrasound for pregnant patient. I also saw many ultrasonograms of babies with congenital heart disease.

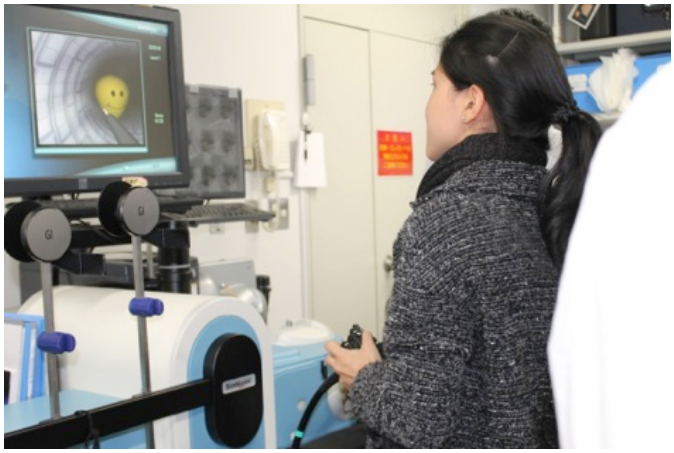
In Anatomy and Cell Biology Department, Dr. Nabil Eid showed us his research about apoptosis and autophagy of hepatic cells after alcohol consumption. I thought it was a useful research that we could in the future develop a treatment for alcoholic patients to prevent liver damage.

In cardiovascular department, I had a lecture about cardiac cycle and heart sound. I practiced listening to heart murmurs from simulation devices. It helped me to understand more clearly.

The next day, I went to Kyoto University to observe Geriatric department. I learnt about medical insurance for elderly people in Japan and was stunted by the fact that Japanese people had a huge amount of elderly people and it would increase in the future. However, the government provided many facilities for them such as AED devices in many public areas, sitting area in the train for elderly people and many other things. I also attended a lecture about many researches about geriatrics from well-known professors.

The last day of my rotation was Gastroenterology department. I observed endoscopy in many cases. The next day, I was invited to attend the OMC graduation ceremony. Every female student was wearing Kimono that day. They looked gorgeous in that suite. In the evening, I attended the graduation party at Hilton Hotel. I met a lot of professors there and they all recognized me and talked to me. I was very much impressed for their kindness.

During my rotation in OMC, I practiced medical procedures in Simulation center many times with OMC students. I also attended karate club once. I really enjoyed the club. OMC students in the club taught me how to kick and punch. I sweat a lot. After practicing, we went to Shabu-shabu restaurant hosted by Nakayama center together. The food was very nice. Professor Hayashi also invited us for a luxury dinner twice. The food in the restaurant was very delicious.



OMC students also took us to Kyoto for a one-day trip. We went to Arashiyama and Fushimi-inari. We also had lunch in a nice restaurant. It was a traditional food containing mostly of tofu. I really enjoyed this trip. After that, we went to Thai restaurant called 'Nettaisyokudou' for dinner. The taste of the food was really similar to one in Thailand. I really had a good time that day. On weekend, we went for sight seeing in many places in Kansai area such as Kobe, Nara, Osaka and Kyoto. The scenic views and attractions were beautiful and of cause the Japanese food was really delicious.

A month in OMC was a wonderful time for me. I had learnt and see a lot. Not only medical knowledge and experiences I gained during staying in OMC, but I also learnt about Japanese culture and food, traveling in Japan and met a lot of Japanese and Korean friends. We spent a lot of time together and I hope that our friendship will last forever.

At last I want to thank you OMC and Siriraj hospital for providing me a great chance to participate in Exchange program for 1 month. I hope that I could apply my experiences obtaining in Japan for developing medical skill to cure patients from their illness in the future.

＜抄訳＞

**大阪医科大学での交換留学を終わって**

ジングスワット・シリカンチョット（Jing）
（マヒドン大学・シリラート病院　4 年生）

大阪に着いたその日から学校の近くの宿泊場所に荷物を置いた後近辺を案内して頂いたりしてお世話をしていただきました。翌日が研修初日だったのですがこの日は三島救命救急センターに見学に行きました。このセンターは命にかかわる状態の患者さんを救う事を目的としており、多くの専門医が協力して処置に当たっています。小畑仁司先生が手術室などを案内しながら日本の救急システムについて説明してくださいました。ハイテクな機器の詰まった救急車なども見ることが出来ました。

翌日花房俊昭教授に学内案内をして頂いた時に見たシミュレーションセンターには心雑音、心臓エコー、消化管内視鏡、大腸内視鏡、その他たくさんのシミュレーターがあり、手技を練習することが出来るようになっていました。林道廣先生と大阪医科大学の学生さんから詳しく使い方を教えてもらって手伝ってもらいながら実際に使わせてもらえました。その夜は大阪医科大学の学生さんたちと交流する機会もありました。

その週の残りは整形外科と放射線科に行きました。外来での流れと各患者さんへの個々の治療計画について見る機会があったのですが、放射線科では教授に個々のがん患者さんに対応した様々な治療方法について説明して頂いた後、高機能の MRI や CT の機械を見せてもらい、フィルムに写っている異常組織の読み方などを教わって興味深かったです。

2 週目。消化器外科では林道廣先生が詳しく一つ一つの手術について解説してくださいました。産婦人科や微生物学教室、感染症対策室、輸血センターでも大変お世話になりました。抗生物質や輸血マネジメントについて教わり、面白そうな実験をしているラボも見せてもらいました。一人だけで皮膚科に行った日があってその時には上田先生が英語で助けてくださったのでたくさん知識が吸収できました。

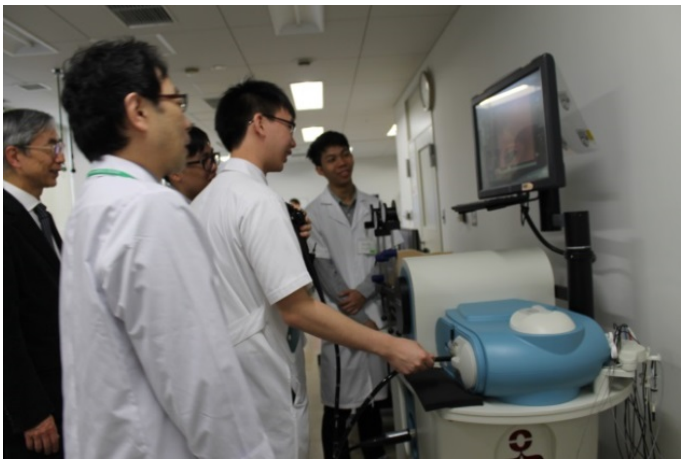
この週に救急の高須先生の引率で阪大病院の高度救命救急センターに行く機会がありました。日本の救急システムについて教わった後、施設を見せていただき、救急ヘリの中も見ることが出来ました。実はヘリは普通の方法では行くことが難しい地域では「普通に」使われる医師や患者の搬送方法です。

3 週目。心臓の手術も脳の手術も見るのが初めてでした。手術は両方共素晴らしく、機器も本当に進んだものを使っていました。リハビリテーションセンターでは患者さんの治癒をうながして通常の状態により早く戻すための道具をたくさん見て面白かったです。教授が筋電図の機械を実際に使わせてくれました。その後、脚のギプスを実際に作りました。国立循環器病センターに金曜日に行きました。先天性心臓病を持った胎児を身ごもったお母さんたちが患者さんでした。たくさんの事をこの日も学びました。

最終週は解剖学と微生物学教室から始まりました。ネビル・エイド先生がアポトーシスと自食作用についてのご自分の研究について教えて下さいました。循環器内科では心周期と心音について教わった後、心臓血管撮影検査などを見学しました。そして京都大学附属病院の老人内科にも行きました。日本の老人人口の増加の推移やどうやって健康管理のシステムや保険を整備して将来について備えているかの説明を受けました。これは将来タイの健康管理システムに取り入れると有用かもしれません。

最後の日に大阪医科大学の卒業式に参加しました。卒業生の着ていたきれいな着物に僕達全員が感動。留学中には他にも日本の歴史と文化について、お茶や空手、京都見学、そしておいしいご飯などたくさん文化体験する機会がありました。

この留学は世界を違う角度から見る機会を与えてくれました。医学だけでなく文化的、社会的な自分の視野が広がったと思います。留学中の全ての経験を忘れずに大切にしようと思います。感謝の気持でいっぱいです。



**Osaka Medical College Exchange Program**

By Jingswat Sirikunchoat
4th year medical student
Faculty of Medicine, Siriraj Hospital, Mahidol University
Thailand

Osaka Medical College (OMC) gave us, Thai students, four weeks full of valuable knowledge, wonderful experience, fantastic impression, and precious memories. I had a chance to enjoy both learning medical information and feeling the culture of Japan.

We got many advices for preparation and useful information for living from Miss Matsumoto Kimiko's email, the college's contact person, beforehand since we still in Thailand. And after we arrived at Takatsuki on the first day's afternoon, she came to greet us and took us on a little tour around the vicinity. She also treated us to a dinner. An apartment that the college provided us was wide, comfortable, and convenience, with only 10-minute walk from the college.

Here at OMC, we rotated to a different department everyday and, sometimes, we visited other universities and medical facilities outside the college.

The first day start with a trip to Mishima Emergency Critical Care Center. This center's aim is to take care of patients with critical

conditions, so they have many specialists working together. Dr. Kobata took us around the center to see their facilities such as operation room and explained to us about critical care's system and management in Japan. We also got a chance to peek inside their emergency ambulance which equipped with many hi-tech gadgets.

Prof. Hanafusa Toshiaki, director of Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC), came to greet us on the second day. He introduced us to other hospital and college's staffs and showed us around facilities. I am really impressive with Medical Skill Simulation Center (MSSC). This center has many advanced simulators for medical practice, for example; heart murmur model, echocardiography simulator, esophagogastroduodenoscopy simulator, colonoscopy simulator, and a lot more. These equipments are great learning tools for medical students to hone their medical procedure's skills. Prof. Hayashi Michihiro and students there gave detailed instructions to us how to use these machines and that help us a lot. We also attended a welcome dinner and met other OMC students in the evening. Everyone was kind and friendly to us.

The rest of the first week was orthopedic surgery and radiology. We got to observe how things progress in OPD and management of each patient's disease. I am quite interested about radiology here because the professor explained a lot to us about different treatment for each cancer patient. He also brought us to see advanced MRI and CT machines and taught us about those lesions in films.

On the second week, we got to observed gynecologic surgery and gastrointestinal surgery. Prof. Hayashi explained every gastrointestinal surgery cases to us in details and the staffs at gynecology department took care of us very well. Also, Professors and staffs from Microbiology and Infectious Control Department and Blood Transfusion Center were all generous. They taught us many things such as antibiotics and overall management of blood transfusion as well as showed us their interesting laboratory. I alone went to Dermatology department one day in this week and had a chance to attend the conference of the department. Prof. Ueda helped me a lot by translating everything into English for me to understand. I got a lot of knowledge, too.

This week we had a chance to visit Trauma and Acute Critical Care Center at Osaka University, guided by OMC Professor Akira Takasu and his staff. We learned how emergency system works in Japan and looked into their facilities. We also able to saw and sat inside the emergency helicopter which is a "common" transportation method for difficult-to-access area.

It is the first time for me to saw both heart and brain surgery on the third week. Both operations were fascinating and their machines and tools in operations were truly technological advance. We visited rehabilitation center and got to see many interesting equipment for helping and curing patients for they will be able to return to their normal state faster. The professor also introduced us to electromyogram (EMG) and let us used it. Moreover, we had a chance to try making a leg brace by ourselves. We went to National Cerebral and Cardiovascular Center at the end of the week to see how they managed pregnant patients who have fetus with congenital heart defects. We got to learn a lot of useful information.

Our last week started with Anatomy and Cell biology department. Dr.Nabil Eid told us about his researches that involve around apoptosis and autophagy of cells which is really knowledgeable and useful. We learned a lot about cardiac cycle and heart sounds on our next day in Cardiovascular department and able to see some investigation such as cardioangiography. This week we also went to Kyoto University to visit its Anti-aging and Geriatrics Department. We got to hear and see how the situation of elderly population in Japan progressed and how Japanese manage their health care system and health insurance to prepare for the future. This topic could proof to be useful for the future of Thailand's health care system as well. Lastly, we were able to join in OMC graduation ceremony on the last day. We were all impressed by many beautiful traditional clothes that graduated students wore.

Japanese history and culture was one thing that could not be forgotten to mention. Thanks to kindness and generosity of OMC students and NICMC, We were able to witness how Japanese people perform tea ceremony, join in karate club activities, visit many eye-catching historical sites in the old capital of Kyoto, and taste the wondrous taste of many Japanese cuisines.

My heart truly burst with gratitude to Faculty of Medicine Siriraj Hospital and OMC for arranged this elective program and gave me this once-in-a-lifetime chance. Many things I had learned during this 1 month in OMC and Japan, not only in medical and education aspect, but also in culture and social aspect as well. This program gave me an opportunity to see and understand the world from many different angles and widen my horizon. Every experience I encountered here were worth keeping.

＜抄訳＞

**大阪医科大学への交換留学**

ピュベット・ウィーラナウィン

（マヒドン大学・シリラート病院　4　年生）

初日に三島救命救急センターに行きました。ICU でたくさんの患者さんの例を見させて頂いて日本での救急救命システムについてたくさん知ることが出来ました。なかなかタイではこんな機会はありません。小畑仁司先生が案内をしてくださって、ハイテクのつまった救急車も見ることが出来ました。

翌日、国際交流センター長の花房俊昭先生に案内して頂いて学内見学をしましたが、大きな図書館や昔の教室が保存してある趣のある資料館、快適そうな病室など面白い場所が多くありました。シミュレーションセンターは中でも素晴らしく、センター長の林道廣先生は機器でデモをして見せて下さいました。心エコーでは心臓のしくみがよく見えましたし、その他内視鏡の機械や雑音を作る機械があって、それで心雑音や肺雑音が作れて実技を学ぶのにとても便利です。その日再びセンターに大阪医科大学の学生さんと行って腹腔鏡操作や血管吻合のシミュレーションをする機会があったのですが、このような機械の操作は今までやったことがなく、自分にとってかけがえのない経験となりました。シミュレーションセンターは OMC の中でも特に好きな場所でした。

毎日違う科にお世話になる関係で毎回違うテーマで医療現場の側面を見る機会があったわけですが、行く科ごとに教授の先生方に指導して頂けるのが素晴らしかったです。丁寧に教えて頂いたおかげでたくさんの事を学ぶことが出来ました。先生方が患者さんに詳しく説明をしながら丁寧に治療に当たっている姿は尊敬すべきものでした。患者さんからも学ぶことが多かったと思います。

解剖学のネビル先生の細胞生物学について教えて頂いた事、リハビリで教授の脚に実際に装着する関節サポーターを作ったことが特に印象に残っています。入院病棟と講義室の他に手術室にもよく行きました。心室中隔欠損の手術、開頭切開の手術、 低位前方切除術など多くのの手術を見学しましたが、自分にとっては食道がんの患者さんの食道切除と胃懸垂の手術が素晴らしかったです。手術のステップを丁寧に逐一説明していただきながら見学しましたが、先生方の手術は完璧で、最新の技術が使われていました。

通常の研修の他に月曜日の朝に花房俊昭教授と行われる抄読会にも参加させていただきました。元々大阪医科大学の学生さんの為に行われているものなのですが、そこに入れて頂いてわざわざ僕達のために教授は説明を英語でしてくださいました。最新の研究について学ぶ機会があってとても有意義でした。

三島救命救急センターの他に大阪大学附属病院や国立循環器病センター、京都大学附属病院など他の外部施設にも行ったのですが、阪大では救急ヘリや丁寧に時間を計算した救急システムがとても印象に残りました。また、循環器病センターでは胎児の時点で心臓に問題がある子どもを妊娠している患者さんが多く、自分の産婦人科の視点を広げるきっかけとなりました。京都大学での老人医学は高齢化の進む日本で今注目されている分野ですが、タイでも同じことが起こるでしょう。ここで学んだことは将来きっと役に立つと思います。こういった施設を見学できたことは本当に幸運だったと思います。

研修最終日には卒業式に参加しましたが、それは僕達の研修の終わりも意味していていろいろな意味で美しくもあり悲しくもあった一日でした。予想通りだったところもそうでなかったところも、言葉ではうまく説明できませんが忘れられない経験となりました。　大阪医科大学の学生さんには 最初にあった時から親しく接して頂いて友情を育むことができました。一瞬一瞬がすばらしかったこの体験を決して忘れることはありません。お世話になった皆様ありがとうございました。

**Clinical Exchange Program at Osaka Medical College**

Pubet Weeranawin

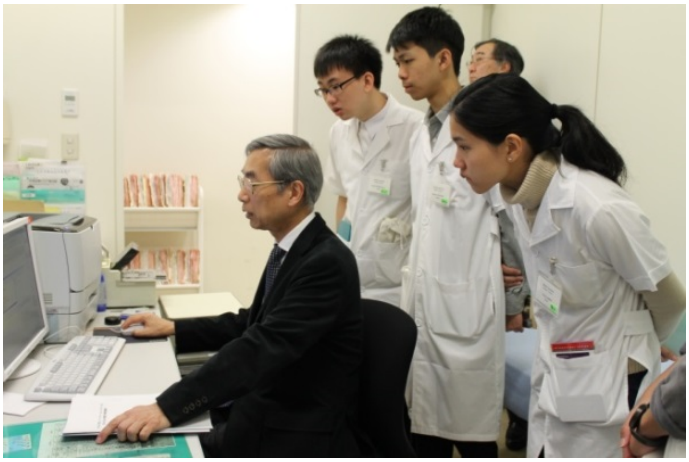
Fourth year medical student

Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University

When I realized that I was accepted into the clinical exchange program at Osaka Medical College I was very grateful and accomplished. I had prepared myself according to the productive advice from Ms. Matsumoto while waiting attentively for the time to come to Japan. Her advice is very helpful and it made me feel certain kindness and generosity of Japanese people.

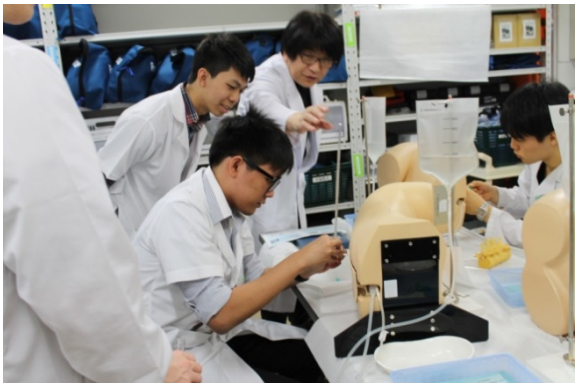
At last the day I had been waiting for had come. I could feel how pleasant my life would be here since after the warm welcome from Ms. Matsumoto who kindly showed us to our residence at Green

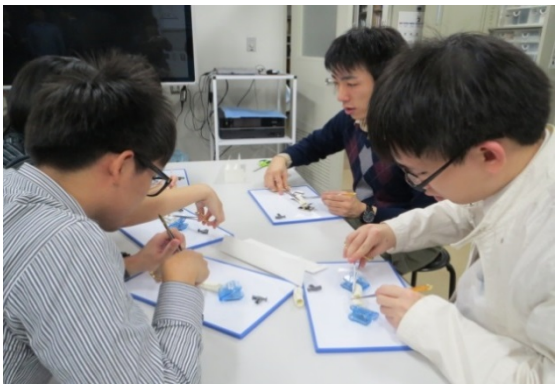
Royal apartment not too far from the college. My new room was very nice and cozy and it was also a very comfortable place for living. However, what impressed me the most about my new dwelling was the welcome card with lovely words written on it. Then, Ms. Matsumoto showed us around Takatsuki city and also the college and I found out how lively this city is. We ended our first trip at the restaurant that served one of Osaka famous dishes "Kushikatsu" which contains a very rich taste inside. That day was certainly a good start for me.



On the first day of my rotation I went to visit Mishima Emergency Critical Care Center not far from OMC. I learnt about emergency system in Japan and also observed many cases in the intensive care unit that could not be easily seen in Thailand. Dr. Hitoshi Kobata, vice-president of Mishima critical care center, kindly explained to us about the center and showed us around. I also got to see the emergency ambulance which is very hi-tech. On the next day Professor Toshiaki Hanafusa, director of Nakayama International Center for Medical Cooperation, treated us with warm welcome and kindly showed us around the college. I found that there are many interesting places in OMC from this tour such as the library which contains tons of interesting books, the museum that exhibits the old-styled classroom which is very classy and classic, and the patient wards that look really pleasant. In the evening I and my friends met with OMC students and I was totally impressed by their friendliness and kindness since the first time. They are very nice and I am eager to have Japanese friends. My wish came true very soon because we got to know each other very quick and this made my life in Japan even more livable.

On the Hospital tour we had a chance to visit the simulation center which I have found very superb. On my first time there Dr. Michihiro Hayashi, director of the simulation center, demonstrated us many simulators such as echocardiogram which helped me understand the relation between the probe plane and the anatomy of the heart easily, endoscopy and also the murmur machine which are the simulator that can produce the heart sound and lung sound so it is very convenient for medical students to learn. Later I had a chance to come back here again accompanied by OMC students who guided us to do the laparoscopy simulation and also the vessel suturing which I have never done before so this was a very remarkable experience for me. The simulation center is totally one of my favorite places here.





Even though my time in Osaka Medical College passed very surprisingly fast, what I have experienced was far more exceeding my expectation. My rotation change everyday so in each day I got to learn new topics. This way I could experience in many aspect of medicine which is very beneficial for me. I also got a great chance to be mentored by OMC professors in each department. All of them kindly taught and explained to me very well, therefore I have learnt tons of information and knowledge. During my rotation, I saw a well-formed doctor-patient relationship and the way professors treat with the patients were very respectful and admirable. I also got a chance to do a lumbar puncture for the first time with the simulator in the simulation center. I have learnt a lot of lessons from both the professors and patients themselves. One of the lessons that impressed me the most was when I and my friends were narrated and explained about the research in cell

biology by Dr.Nabil from department of anatomy. The research really inspired me. Another memorable lesson for me is when had a chance to make a brace from the professor's leg himself in the department of rehabilitation. Beside patient wards and lecture rooms, I also spent time in the operation rooms where I observed many spectacular and amazing surgeries such as VSD closure, craniotomy, low anterior resection, etc. but the most superb surgery for me is the esophagectomy and gastric pull-up which was done for the patient with esophageal cancer. The surgeons performed the operation flawlessly and kindly explained the procedure to us. I also recognized many latest surgical technique and technology here.

Apart from the rotation, I had a chance to experience many other activities in the college for example the journal club held every Monday morning by professor Hanafusa. The session was originally held for OMC students to improve their English skills but professor Hanafusa kindly spent time explaining to me and my friends very well. The journal used was so interesting that I have learnt load of knowledge and it was a good opportunity for me to know about something new. I also got a chance to attend the karate club. Guided by the club members I found out that karate was very attractive and elegant martial arts. It was an unforgettable experience for me and also very fun. The other traditional experience I had here was the tea ceremony. Making smooth bubble is a very delicate and gracious work and the taste of matcha was really good.

We not only rotated in OMC but also visit other hospital as well. Beside Mishima critical care center mentioned above, I went to visit Osaka University Hospital to learn about the doctor helicopter system. I had a chance to look inside the helicopter itself and found out that it was very impressive and under well-planned system it is used to save many people life. The other place I had a chance to visit was National Cerebral and Cardiovascular Center. In this place there were a lot of pregnant patients with congenital defect of the fetus especially congenital heart disease which are really rare so it really helped me learn a lot and expanded my vision and knowledge in obstetrics. The last place I visited was Kyoto University. Kyoto University is completely unique and beautiful historical place. I have seen the oldest dormitory in Japan which is made of wood and the scenery there is very nice. At Kyoto University I learnt about anti-aging and geriatrics medicine which are very hot-issue in Japan at this moment and will be in Thailand soon so the knowledge I gained here will surely help me prepare myself for the future to come. I consider myself totally fortunate to have a chance to visit many amazing places like this.

In Japan I didn't only experience in academic aspect but I also enjoy Japanese lifestyle as well. I have tasted many kinds of delicious Japanese food beside kushikatsu such as sushi, sashimi, okonomiyaki, yakiniku, takoyaki and many more. Transportation in Japan was also very convenient. The public transportation system is very well-formed so I could go anywhere easily by bus or train. Thus, I have traveled to many places in Osaka prefecture and the city nearby such as Kobe or Nara but the most memorable trip for me was Kyoto sightseeing with OMC students. They took us around the city to see many historical places and beautiful refreshing nature. We also had a chance to taste the tofu dishes and traditional Japanese sweet which were totally blown me away by such a wonderful taste.

On the last day of my rotation I and my friends had the ultimate chance to join the graduation ceremony of the sixth year medical students. It was really a beautiful and memorable moment but also very sad for me because this indicated the end of my journey here. The things I got from here both expected and unexpected could not be neither measured nor described properly by words but it will never forget what a wonderful moment I had here. I will be sure to visit Japan and Osaka Medical College again. Thank you for everything that brings me here and every moment that takes my breath away.

＜抄訳＞

**大阪医科大学の交換留学に参加して**

ウィツァルット・ナンツァシ（ジェイム）
（マヒドン大学・シリラート病院　4 年生）

大阪医科大学の皆様、暖かく歓迎して頂いてありがとうございました。この 4 週間、勉強も自由時間もとても充実していました。忘れられない思い出となりました。

初日に三島救命救急センターに行きました。専門の先生が何人も

いらっしゃるので事態に応じて同時に多角的に重症患者に対応できる仕組みになっていました。小畑仁司先生が ICU の説明を逐一して下さったりオペ室や緊急治療室などを案内してくださったりしました。又、このセンターではホリスティック医療が行われていて、それを見せて頂きました。とても特別な体験でした。

オリエンテーションは二日目でした。学内で一番いいなと思ったのがシミュレーションセンターです。腹腔鏡，心臓エコー、食道十二指腸内視鏡など多くのシミュレーターがあり、大阪医大の学生さんはここでいつでも技術を練習できます。わが校のマヒドン王子の「学びの中核は実践にある」というモットーと一致しているなと思いました。僕も学生さんについてもらって何回かセンターで練習をする機会があって、とても親切に教えてもらいました。

大阪大学附属病院の高度救命救急センターに行った時は患者さんの所にいかに早く到達できるかを追求した救急救命のシステムに大変感銘を受けました。ドクターヘリ体験させて頂いた時はドラマのワンシーンに出ているようでワクワクしました。

国立循環器病研究センターに行った時は周産期関連の心臓病に関連した事を学びました。先天性心臓病とはつまり胎児の時点で心臓の血流に問題があるということなのですが、胎児の心臓の異常を判断するための超音波エコーの読み方や出産後にどうそれを活用するかを教えていただき、滅多にない症例も幾つか見せていただきました。

京都大学病院では老人内科を見せていただきました。どう老人問題に対処するのか、医療の立場から考えることはとても大切ですし、タイも将来同じような問題を抱えることになると思うので参考になると思いました。病院内も見せていただきましたがみなさんとても親切にしてくださいました。

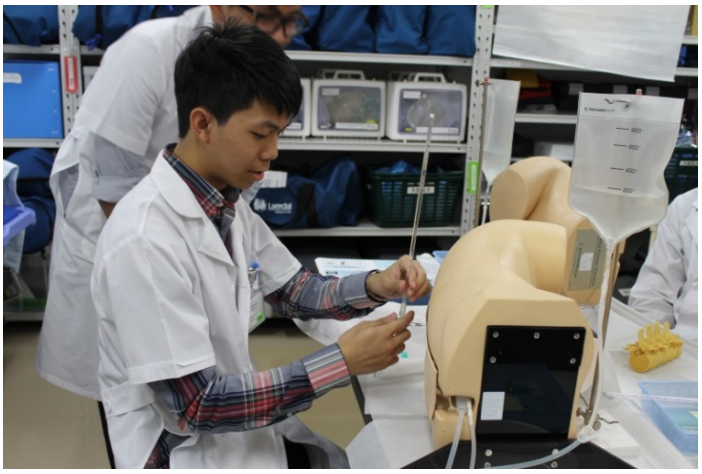
今回の留学では外部の施設にたくさん行く機会があって、こんなにも幅の広い日本の医療現場を見る機会を用意していただいたことに感謝しています。

大阪医科大学では毎日違う科に行ったので様々な分野の医療を見ることが出来ました。整形外科の外来では先生が子供の患者さんに絵を描いてリラックスさせるようにしていてとてもいいアイデアだと思いました。神経内科では午前中は回診して午後からは腰椎穿刺のやり方を木村文治先生に丁寧に教えていただきました。消化器外科では食道がんやすい臓がん、直腸がん、先天性胆道拡張の手術を見学しましたが、全てのケースについて今何をしているのか林道廣先生はじめ先生方が逐一説明してくださいました。胸部外科では心室中隔欠損症の赤ちゃんの手術を見ることが出来ました。僕は術野に入れたのですが 5 時間休憩なしでドキドキしながら先生の素晴らしい手術をずっと見ていました。まるでドラマ「医龍」みたいでした。（実はこのドラマを見て僕は心臓外科医になろうと思ったのですが）そのあと ICU で術後経過を見ました。 薬理学ではマウスにおけるアテローム硬化症の定量化について学びました。初めてマウスを解剖して大動脈を取り出し、それから動脈硬化プラークがある組織とない組織を区別するために血管を染色しました。これは面白かったです。脳神経外科では回帰神経膠腫の開頭手術を見ました。頭を開けた手術を見るのは初めてでした。第三内科では心周期と心音について集中講義を聞いて、その後シミュレーションセンターの機械で心雑音を聞く練習をしました。午後から伊藤隆英先生が動脈石灰化のケースのカテーテルを見学させてくださいました。

月曜の朝に行われているジャーナルの抄読クラブにも参加できて指導をしてくださった花房俊昭教授には感謝したいです。最新のニュースが読めてとても良かったです。

勉強以外に観光や文化体験も数々しました。空手はタイのボクシングに似ていますね。京都のお寺はとても落ち着いた雰囲気でした。

今回の留学で学んだこと、体験したことを自分の医療技術を向上させるために役に立てたいと思います。再びプリンスマヒドンの言葉を引用するならば「本当の成功とは学ぶことそのものではなくそれを人類に役立てることである」ということです。自分のベストを尽くして将来患者さんを治療したいです。



**Exchange Program in Osaka Medical College**

Witsarut Nanthasi　(Jame)
4th year medical student
Faculty of Medicine, Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand

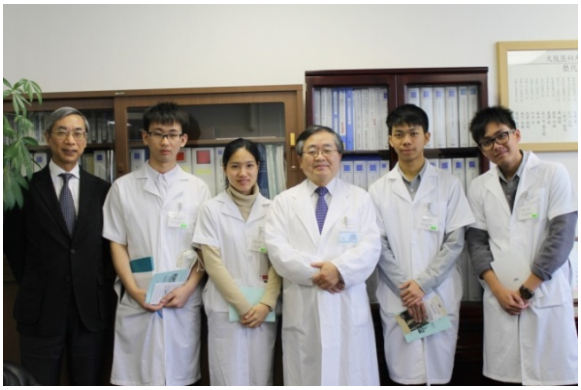
The priceless experience is still kept in my mind.

The exchange program in Osaka Medical College for 4 weeks was such a wonderful experience in my life. I greatly appreciated the kindness and hospitality of OMC people. Everyone took care of me very well and gave me a warm welcome. I gained a lot of experience-both of academics and social life.

On the first day, I went to Mishima Emergency Critical Care Center. The goal of this center is to take care patients with the severe condition. There are many physicians who have their own specialties, so they can manage patients who have many problems at once. This center showed me about the holistic medicine. In this center, Dr. Kobata took care of me very well. He explained every case in the ICU, and took us to observe around the center such as the operation room, the emergency room. That's so impressive.

On the orientation day, I met Prof. Toshiaki Hanafusa who is the director of Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC). He took me around OMC, and let me meet

President and Director of OMC. In OMC, there are many facilities provided for medical students. One I like most is the Medical Skill Simulation Center (MSSC) which contains many kinds of medical simulator; for example, laparoscopic simulator, echocardiography, esophagogastroduodenoscopy etc. Thus, OMC students can practice by themselves any time to accumulate their own medical skills. That's quite corresponding to the motto of Prince Mahidol 'the core of learning is to practice'. I also had chances to practice those medical skills by the supervision of OMC friends; they're so kind.



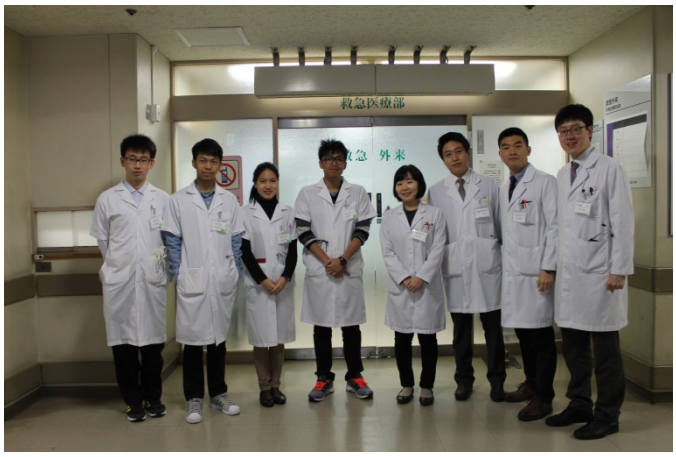
Besides Mishima Emergency Critical Care Center, I also had opportunities to visit many interesting medical institutes. I would like to say thank you to NICMC officers to provide me these great opportunities. They made me have wide vision among medical fields. I went to Osaka University Hospital to visit Department of Traumatology and Acute Critical Medicine. In this center, I learnt about the emergency system in Japan which is so effective and can access to patients quickly. I was deeply impressed by the Japanese emergency system. I also had a chance to experience Doctor Helicopters. That was so interesting; it reminded me of Japanese drama 'Code blue'. I felt like I was in the scene of Code blue-that's so exciting. By the way, on the day I went to National Cerebral and Cardiovascular Center, I visited Department of Perinatology, which is concerned the health of mother and baby accompanied by cardiac disease. I faced rare cases of cardiac disease. Doctors in this center taught me about fetal blood circulation, which is the basics for the congenital heart disease. I also learnt how to interpret the ultrasonogram of abnormal fetal heart, and how to do ultrasonography for the antenatal care. Additionally, I visited Department of Geriatrics in Kyoto University Hospital. I learnt about the elderly status in Japan, and how to manage that problem. This topic is very good because there will be more elderly people in Thailand in the near future. I was taken around Kyoto University by research students and Thai surgeon. They are very kind and friendly.

In the part of the rotation in OMC, I rotated to different departments each day. Those made me see varied fields of medicine. In the Department of Orthopedic Surgery, I observe outpatient clinic. I saw the good patient-doctor relationship. The doctor drew a picture for kid patients to encourage patients. That's very nice. In the Division of Neurology, Internal Medicine, I observed ward round in the morning, and practiced the lumbar puncture in the afternoon. Dr. Fumiharu Kimura explained me each case and taught how to do lumbar puncture step by step. In the Department of General and Gastroenterological Surgery, I observed the operations which are about esophageal cancer, pancreatic cancer, rectal cancer, and congenital biliary dilatation. I appreciated so much that surgeons explained me each case and each step of operation, also Dr. Michihiro Hayashi. In the Department of Thoracic and Cardiovascular Surgery, this was the highlight for me because I got a chance to scrub-in and observed the operation. The case was the baby with ventricular septal defect. The operation was very exciting and interesting. The surgeon performed the operation very well. It reminded me of 'Team Medical Dragon'-Japanese drama-which inspired me to become a cardiovascular thoracic surgeon. I observed the operation for 5 hours without any rest, but I was excited all the time. Then, I learnt about the post-operative care in the ICU. In the Department of Pharmacology, I learnt about the quantification of atherosclerosis in mice. This was my first time to dissect mice to collect the aorta. That was so interesting. Then, I stained the aorta to differentiate the tissue with or without atherosclerotic plaque. In the Department of Neurosurgery, I observed the case of recurrent glioma by doing craniotomy-open the skull-and removed tumor. It was my first time to observe the craniotomy. In the Division of Cardiology, I had an intensive lecture about cardiac cycle and heart sound by Dr.Ito. Then, I practiced about heart murmur with the simulator in MSSC. This class was interesting. In the afternoon, Dr. Takahide Ito took me to observe the cardiac catheterization in the case of coronary calcification. Moreover, every Monday morning I joined the journal club which is about reading a recent journal. The topic is about STAP cells (Stimulus-triggered acquisition of pluripotency cell). That's so interesting. I would like to say thank you to Prof.Hanafusa to provide me this recent knowledge.

Aside from academics, I experienced about Japanese culture-Tea ceremony and Karate. Karate is quite similar to Thai boxing. I enjoyed practicing Karate so much. Japanese friend

taught me step by step and let me practice with him. OMC students also took me to Kyoto for sightseeing. We went to Arashiyama, Tenryuji Temple, Fushimi Inari Shrine, and Gion. The nature in Japan is very beautiful, and the Japanese temple is very calm. On the last day of an exchange program, I joined the OMC graduation ceremony. I saw female medical students wore Kimono suit; that's so fantastic and looked beautiful.

Time flies. I really enjoyed my stay in Japan. Everyone is very kind to me; it's very impressive. This unforgettable memory must be kept in my mind. I would like to say thank you to everyone that gave me this wonderful opportunity. I am going to apply this knowledge and experience to my life to develop my medical skill. The reason is to be a good doctor and to take care patients with my best in the near future. That is corresponding to the motto of Prince Mahidol which is 'True success is not in the learning, but in its application to the benefit of mankind.'



**（タイ・マヒドン大学 シリラート病院にて行われた国際微生物学・免疫学・寄生虫学 国際コンペティション（SIMPIC）に学生４名を派遣）**

平成 26 年 3 月 11 日から 3 月 14 日までタイ・マヒドン大学で行われた国際微生物学・免疫学・寄生虫学コンペティション（今年度より SIMIC から SIMPIC に改名）に、青木一晃君、上迫準太君、浅野彰之君、亀岡秦幸君の 4 名（いずれも派遣時 4 年生）が参加しました。以下に各参加者の感想文を掲載しています。

**「SIMPIC に参加して」**

派遣時4年生　青木　一晃

2014 年の 3 月 11 日から 14 日まで Siriraj International Medical Microbiology, Parasitology and Immunology Competition（SIMPIC）に参加してきました。今回が第三回目で、昨年までは SIMIC という名前でした。今年は「One Health」がテーマだったので寄生虫学が加わったようです。

この WS では感染症学のコンペティション(予選は多選択式マーク試験と一分間試験。予選以降は画像問題や早押しなど。)がやはり一番の魅力ですが、私にとっては今後の学生生活を送る上でアジア圏の学生との交流が非常に役立ったように思えます。30 の参加大学の内タイとインドネシアの大学が多数を占めていましたが、彼らの英語力や感染症の知識の非凡さは日本では味わえないものでした。率直な感想としては、とてもこのままでは世界で通用しないなと思いました。日本と東南アジア圏とでは罹患する感染症が違うため熱帯医学の知識量で負けるのは仕方のないこととしても、彼らの英語力に関しては素晴らしかったです。日本では、日本語の教科書で勉強し、日本語で授業を受け、日本語で試験を受けます。対して彼らは、英語の教科書で勉強し、授業の半分を英語で受け、英語で試験を受けると言っていました。日本語で勉強することがいけないとは私は思いません。私は英語のものより日本語の教科書の方が勉強しやすいと思いますし、部活のある先輩は「日本語の教科書がある」というのは我々日本人にとってステータスだ、とも仰っていました。

ただ彼らが言うには、普段の勉強で英語を取り入れているお陰で「日常会話と違ったフォーマルな表現」を獲得出来たようです。グループ発表や課題のレポートで英語を用いることによって、英会話や海外旅行では得られない丁寧な表現が得られるとのことでした。将来、学会発表やポスター発表など英語を用いることが我々医学生は多いと予想される中、丁寧な英語を勉強できる教育体制は素晴らしいと思いました。是非、本学も積極的に英語をカリキュラムに取り入れるべきだと私は考えます。

最後に、自分はこの WS に参加して、「もっと低学年の内に参加していれば」と感じました。微生物学が二回生の後期、感染症学が三回生の前期にあるので二回生時に参加すると感染症学の観点では他の学生と比べ知識量で劣ってしまうかもしれませんが、私は二回生の 3 月をお勧めします。理由は、世界の学生の中での自分の立ち位置を認識出来るからです。彼ら海外の学生のレベルの高さを肌で感じれば、三・四回生での臨床医学の勉強への取り組みも変わると思いますし、何より低学年の内にあれだけ海外の学生と交流できる機会は、プラス以外の何物でもありません。海外から見た日本の印象も分かるでしょう。(まさか「日本から来ました！」というだけで、漫画やアニメの話であれだけ盛り上がるとは思いませんでした。)機会があれば、医師になって働く前にもう一度参加したいと思います。

今回の留学の機会を与えてくださった中山国際医学医療交流センターにお礼を申し上げたいと思います。また手厚く歓迎してくれた

Siriraj の学生にも心から感謝致します。今回の経験を今後に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

**SIMPIC に参加して**

派遣時 4 年生　上迫隼太

今回タイのマヒドン大学の留学をさせていただきました、上迫隼太です。

留学に対して、漠然とした憧れを持ち、他の国の医学生と交流してみたいというのが

志願の理由でした。 今回の留学は、他と異なり、クリクラ形式でなくクイズコンペという形式で行われました。

詳しいことは SIMPIC とネットで見ていただきたいのですが、今回は日本人が大阪医科のみで基本ほとんど英語で生活するという暮らしでした。驚いたことに、他の国の学生は母国語が英語ではないにかかわらず英語が堪能な学生が多かったです。

英語で日常生活する経験が全く無かったので、とても苦労したと同時に悔しい思いをしました。例えば、SIMPIC ではディスカッションの時間があるのですが、そこでもし英語が苦手であると英語を話すことが思考の中心になり、議論の内容について考えることができなくなり、結局、稚拙なことしかいえないということが多くありました。なので英語を話すことは、話すこと自体以上に重要な意味をもつと実感しました。

最後に、留学をさせていただいた中山交流センターの方、花房教授ありがとうございました。

**SIMPIC 感想文**

20101003　浅野　彰之

私は 2014 年 3 月 11 日～14 日にタイで行われた SIMPIC に参加してきました。SIMPIC は、初日の参加者の交流を深めるゲームから始まり、2日目に各大学で感染症のテストを受け、3日目にグループごとの遺跡、動物園観光、最終日4日目に成績上位大学による決勝戦、夜は最後の夜ということで farewell パーティーに終わるというわずか4日ですが非常に内容の濃いプログラムとなっておりました。

私はこの SIMPIC でいろいろ経験をさせてもらい多くの事を感じ考えたりしましたが、特に一番印象に残っていることは、世界各国から来ている医大生の英語力の高さです。彼らは英語をあたかも母国語のように流暢に何も違和感なく話しており、医学英語も完璧に知っているためマヒドン大学の教授陣らとさえも同等に医学・疾病についてディスカッションしたりしておりました。私もこの SIMPIC のために英会話に通い、また英単語を覚えていくなどしてかなりの準備をしてある程度の自信をつけて臨んだのにも関わらず、彼らと対等に話すことがなかなか出来ず（特にある疾患のテーマのディスカッションの時はほぼ何もしゃべる事が出来なかった）かなりのショックを受けました。もう少し私に英語力があれば、ディスカッションにも参加できて、自分の意見も述べられたのに、と思うと、とても残念な気がしました。

これからの医学は日本という狭い地域にとどまらず世界の各国との連携研究、情報交換、医学協力が必ず必要になってくると思います。そのような医学交流を行う上に英語力は必要不可欠なものになってくるということを今回のこの留学で強く認識させられました。次にこのような機会があった時には、堂々と他の国の学生たちと意見交換できるよう、この経験を生かし日々努力していきたいと思いました。

また、なぜそこまで英語力が高いのかというのを不思議に思ったので参加している世界の友達に聞いてみたところ、どの国も英語の参考書を使い、講義も英語という ALL English のスタイルで結構授業が行われていると言っていました。私はそれを聞いてとても驚きを受けましたが同時に、もっと英語を勉強しなければ到底追いつけないだろうなと痛感しました。

私は留学が今回が初めてで、さらに慣れない英語で1日中ディスカッションしたり、勉強したりと楽しいことばかりでは無く、とても不安で大変だった事もありましたが、同期の3人と励ましあったり支え合ったりした事によって乗り越える事が出来たと思っております。本当にこの3人には感謝しております。

最後にこのような貴重な体験をする機会を与えて下さった大学に感謝しております。ありがとうございました。

**④. 台北医学大学**
**（台北医科大学選択臨床研修派遣　学生 4 名）**

本学では国際交流推進の一環として昨年 3 月に台北医学大学と交流協定を締結し、学生・教員の相互研修を積極的に行う事になりました。それに伴って昨年 10 月に初めて台北医科大からの留学生を4人受け入れましたが、平成 25 年 4 月 1 日～4 月 26 日には長谷川 幸世さん、鄧 傑之君、神部 浩輔君、藤田 将司君の4人が本学からの第一期生とし て台北医学大学附属病院に派遣されました。違いを見つけるばかりではない留学の意義や、これから留学を考えている学生には参考になるような実習内容が報告されています。

**台北医学大学派遣を終えて**

（長谷川 幸世さん）（派遣時 6 年生）

2013 年 4 月、私は台湾の台北医学大学にて 4 週間の実習を受ける機会をいただきました。

台北医学大学は台湾の首都台北にある私立の医学系総合大学で、医学部のほか、歯学部, 薬学部, 看護学部など 7 つの学部からなり、学生数は 6000 人近くにのぼります。台北医学大学と大阪医科大学との交流は昨年度から本格的に始まり、大阪医科大学から学生が派遣されるのは私たちが初めてとなります。

台北医学大学の理念に「グローバルな医療人を育成すること」とあるように、台北医学大学には常に世界各国からの留学生が来ており、医学部の病院実習のみならず、他学部での研究などを目的として様々な国からの留学生を受け入れているようです。非常に“風通しの良い”大学であるように思いました。

さて、私は台北医学大学附属病院において、産婦人科, 一般外科, 放射線診断科, 放射線治療科でそれぞれ 1 週間ずつ実習に参加してきました。

台湾での医学教育は 7 年生で、5～6 年生が Clerk と呼ばれ、クリニカル・クラークシップを受けます。7 年生は Intern と呼ばれ、事務的な業務や当直などに携わるそうです。私は今回、Clerk として、台北医学大学の主に 5 年生の学生さんと一緒に実習を受けました。その内容は、大阪医科大学におけるクリニカル・クラークシップと非常に似ており、指導医の先生のそばについて診察や手技を見学したり、少人数のグループで授業を受けたりします。

産婦人科では、まず、レジデントの Liu Angel 先生から産科病棟の案内をしてもらうとともに、妊婦さんのエコー検査を体験させていただきました。双胎のエコーも見学させていただき、非常に勉強になりました。台湾では医療保険のおかげで大学病院のような高度医療施設でも比較的安価で分娩できるため、大学病院での出産を希望する妊婦さんが多いそうです。

続いて、医学部長をされている Chii-Ruey Tzeng 先生の不妊外来を見学しました。Tzeng 先生は 1985 年に台湾における第一号の試験管ベビーを成功させた不妊症の権威であり、台北医学大学の看板診療科といっても過言ではないこの不妊外来には、毎日ひっきりなしに患者さんが来院していました。台湾の出生率は 2010 年度で 0.895 と著しく低下しており、晩婚化もあって不妊治療の需要が高まっています。Tzeng 先生が 1996～2008 年に 3000 人の人を対象に行った調査では、不妊の原因の第 1 位は子宮内膜症で 35%, 続いて卵管因子が 20%ということでした。子宮内膜症が原因で不妊となっている患者さんに対してはまず GnRH アナログを 1 ヶ月投与した上で不妊治療を行っていらっしゃいます。先生の Clinic では、外来診察のほか、人工授精や採卵, そして卵管留水腫に対する卵管クリッピング術を見学しました。特に人工授精室にはベッドが 7～8 つ並んでおり、次々に来る患者さんの人工授精を Tzeng 先生が効率的に進めていく姿がとても印象的でした。

手術室では、Wei-Min Liu 先生によるロボット手術を少しだけ見学しました。Liu 先生は手術が非常に速く、ロボット手術を使った手術時間で世界記録を持っていらっしゃるそうです。

また、産科では Heng-Kien Au 先生から産褥期の診察方法や、出生前診断についてベッドサイドで講義していただきました。Array CGH 法で猫鳴き症候群などの疾患を出生前に診断することができるようになります。実際に羊水穿刺を 2 例ほど見学することができました。患者さんによって希望する検査の内容が異なるため、採取する羊水量も変わるようでした。

こういった見学の他にも、日々 Clerk 向けの授業が行われていて、Ching-Wen Chang 先生からは婦人科腫瘍の取り扱いについて、Yi-De Wang 先生からは分娩について教えていただき、最終日に Ching-Hui Chen 先生からはテスト形式で産婦人科の知識を整理するまとめをしていただきました。

一般外科では、乳腺グループの一員として病棟の患者さんの診察を見学するほか、消化器外科の手術も見学させていただくことができました。台北医学大学には附属病院の他、萬芳医院と雙和医院の 2 つの関連病院があるのですが、附属病院はその 3 つの中では最も自由診療による手術が盛んだという話を学生の方から聞きました。特に附属病院の消化器外科では、肥満に対する胃切除や、Da Vinci を用いたロボット手術が盛んに行われており、週に 2～3 回は必ずロボット手術が入っているようです。もちろん癌の治療も積極的に行われていますが、私は手術見学の時に、なるべく日本で見たことのない手術を見るように心がけていたので、振り返って見ると、肥満の治療やロボット手術を多く見学しました。

特に肥満に対する外科的治療は、Sleeve Gastrectomy を二件, Gastric Binding を一件見学することができました。肥満の手術で有名な Weu Wang 先生は、手術を執刀しながら、手術室に見学に来ている学生に講義をしてくださり、肥満の手術の術式から手術による合併症まで一気に整理することができました。

Da Vinci の手術は産婦人科でも少し見学できたのですが、最初から最後まで通してすべて見学できたのは今回が初めてとなりました。私が見学した症例は大腸癌に対する結腸切除術で、手術室に Da Vinci をセッティングするまでの時間は長かったのですが、手術が始まってからはスムーズに進み、予想よりも早く終わった印象がありました。また、執刀医の先生が覗く画面を私も見させていただいたのですが、非常に立体的で、脳神経外科の実習で見学したマイクロの画面に似ているように感じました。

ロボット手術を行うことのメリットの 1 つに手術に携わる人の数を少なくできる、という点が挙げられると思うのですが、実際にはたとえロボット手術であっても執刀医の先生, 助手の先生, 器械出しの看護師さんが必ず 1 人ずつは手術に入っているという状況でした。

それならば従来通りの腹腔鏡手術と必要な人数は大して変わらず、ロボットを導入し準備するのに必要なお金や時間を考えると、ロボット手術は必ずしも優れているというわけではないように思いました。ただ、最新の技術ということで、台北医学大学には海外からも患者さんが紹介されてやって来るようです。

乳腺外科のグループでは、Chin-Sheng Hung 先生にお世話になりました。Hung 先生は日本の亀田総合病院に留学されていた経験があり、日本での乳腺外科の状況にも詳しく、毎日ある病棟回診で非常に親切にご指導いただきました。Hung 先生の手術を何例か見学させていただいたほか、外来も見させていただき、乳房のエコー検査を見ることができました。台湾では外来診療に予約制度がないため、患者さんが集中する時間帯とまばらになる時間帯があるようです。

また、私が回った週には、小児外科である Chou-Fu Wei 先生の講義がありました。先天性食道閉鎖や肥厚性幽門狭窄症といった小児消化器疾患から、泌尿器領域の疾患まで教えていただき、非常に勉強になりました。

そのほか、一般外科の実習では、学生は 5 週間をかけて各班を回り、様々な講義や PBL, 勉強会に参加するようです。そのため、事前に英語論文を読んでくるように課題を課され、自分が担当した症例についてプレゼンするなど、学生にとって“最も実習がきつい科”であるようですが、一般外科での実習を終えた学生さんたちはきっと大きく成長することだろうと思います。

放射線診断科では、Hung-Jung Wang 先生, Ching-Huei Kung 先生, Yi-Hsiang Lin 先生から画像診断についての講義をそれぞれしたいただいた他、Ting-Kai Leung 先生の下で DSA や乳房 MRI を見学しました。

欧米では乳房の MRI がスクリーニングに有用であるとされているようですが、日本ではまだ一般的でなく、最新のものでは 2012 年 5 月に日本乳癌検診学会がガイドラインを作成しているようです。私自身も、乳房 MRI の画像を実際に見るのは初めてでした。乳房 MRI の画像はカラーでイメージングされ、視覚的にとらえやすいので、乳房切除後にインプラント挿入を考えている患者さんに対して、“癌が完全に取り除かれ、全く存在していない”ということをわかりやすく説明するのに有用だと先生は仰っていました。

最後に回った放射線治療科では、放射線治療の見学の他、各科合同で行われる Oncology Conference に参加させていただきました。

まず、Lai-Lei Ting 先生から放射線治療の原理やその種類を講義していただき、実際に子宮頚癌に対する腔内照射を 2 例ほど見学させていただきました。また、Chia-Chun Kuo 先生の外来を見学し、放射線治療を終えた患者さんのフォローアップで、どのような副作用が出るか、といった点を学ばせていただきました。先生の外来診療では、患者さんから受ける質問の多くは最先端の放射線治療にどれくらいの費用がかかるか、というものだそうです。台北医学大学では Tomotherapy がさかんに行われていますが、一回の照射でおよそ 7000NTD（日本円に換算すると 24000 円ほど）かかります。しかし、患者さんの多くは外科など他科から“自分の癌を治療するには Tomotherapy が効果的である”という説明を受けて放射線治療科を受診するため、外来診療ではしばしば治療費の問題を議論するのに多くの時間を割かれると仰っていました。

また、台北医学大学附属病院には癌症中心（Cancer Center）という組織があり、そこで日々、あらゆる臓器の癌をテーマに各科の先生が集まってカンファレンスを行っています。私が参加させていただいた週は、頭頚部腫瘍, 乳癌, 肺癌, 泌尿器癌についてのカンファレンスが開かれていました。たとえば頭頚部腫瘍カンファレンスには、耳鼻咽喉科・頭頚部外科, 口腔外科, 放射線診断科, 放射線治療科, 血液腫瘍科, 核医学科, 病理部, 病棟師長といった方々が集まります。1 つ 1 つの症例について、まずは担当医の先生が患者さんの病歴をプレゼンし、続いて放射線診断科の先生が画像の所見を述べ、それをもとに全員で臨床病期を確認し、今後の治療方針を決めていく･･･という流れになっていました。このように科を横断したカンファレンスが定期的に行われているのは非常に素晴らしいと思いました。

さて、この 4 週間で私が実感したことがあります。

まず、台湾と日本を比べてみても、医療技術や設備などで大きな差はありませんでした。特に台湾は、医療保険や医学教育などの面で日本と酷似しているため、私は日本にいる時と同じように実習に参加することができましたし、医療費に関する話も違和感なく受け止めることができました。

私は今回の実習に参加するまで、日本の医療の方が少し進歩しているのではないか･･･と考えていました。もちろんそういう分野もありますが、すべてにおいて日本が優っているというわけではなく、台北医学大学の方が進んでいる面もあり、たった 4 週間ではありましたが多くのことを学ぶことができました。

日本も台湾も、アメリカやヨーロッパの医療を目標にしつつ、自分の国の患者さんを救うために日々医療を進歩させています。“留学するならば最新の医療が見られる欧米に行かなければならない”と考えている人もいるかもしれませんが、むしろ人種や境遇が似ているアジアの国々でこそ学べることもたくさんあるように思います。

自国の医療に従事しながら、時折近所の国々と交流し、お互いの自信のある分野の技術を共有していけば、アジアの医療はより発展すると思います。私は今後、“アジア医療圏”という視点を持ちながら医療に携わっていいくべきだと強く感じます。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会をくださった、台北医学大学の先生方, International Office および Department of Education and Research の皆様, 花房教授をはじめ中山国際医学医療交流センターの皆様, そして毎日私の面倒を見てくれた台北医学大学の心優しい学生のみなさん、すべての方々に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

**台北医学大学での臨床実習**

派遣時 6 年生　鄧 傑之

この度一ヶ月間台湾の台北医学大学に留学させていただきました。動機としては2つあり、1つは私は台湾人なので、祖国台湾の医療の現状を見たいから。もう一つは私は生まれが日本で台湾には何度も行ったことがありますが、長く滞在したことがなかったので現地の生活を少しでも体験してみたかったからです。私は幸い中国語が話せたので、実習はほとんど中国語で行われました。

台北医学大学は、1960 年に創設され、QS 世界大学ランキング（2012 年）で世界 68 位にランクされる、台湾有数の私立医療系総合大学です。しかも、台北医学大学は台北101というかつて世界で 1 番高いビルで有名なビルの近くにあり、かなり都会です。台北医学大学附属病院は JCI（Joint Commission International）というアメリカ基準の認証を取得している病院です。ちなみに、2013 年 5 月時点で日本でJCIを取得している病院は7つしかありません。私は救急、感染症科、家庭医学科、産婦人科、東洋医学科の5つの科を回らせていただきました。それぞれの科で体験させてもらったことを書きたいと思います。

台湾は日本とは違い、患者は自分で受診する病院を選べるという権利があります。救急も日本のように1次・2次・3次救急指定病院という制度はなく、患者が自分で病院を選びます。これは一見良いように見えますが、医療者側としては本当に大変なことで、重症度が患者によってまちまちなので、患者の処理に困るといった場合が時々見受けられました。ただし、私にとってはただの風邪から本当に命に関わるような重篤なケースまでを短期間で見学できることができたので、学生やインターンのような人にとってはいいのかもしれません。

感染症科を回っているとき、ちょうど中国本土で H7N9 インフルエンザが流行していて、その対策をするようにと衛生署（台湾の厚労省）から通達があったところでした。もし万が一外来で H7N9 疑いの患者が発生した場合病院スタッフがその患者にどう対処したらよいかということを感染症科の先生やスタッフで話し合っているところを運良く見ることができました。そしてその通達から数日も経たないうちに衛生署から監査の人が数人来て、病院を徹底的に調べましたが、合格をもらっていました。台湾では 2003 年の SARS の流行でかなりの死亡者が出たので、今回のような新しい感染症に対してはかなり敏感になっていると感じました。日本では近年新興感染症が発生していないので、新しい感染症に対する意識では台湾に負けているのかもしれません。

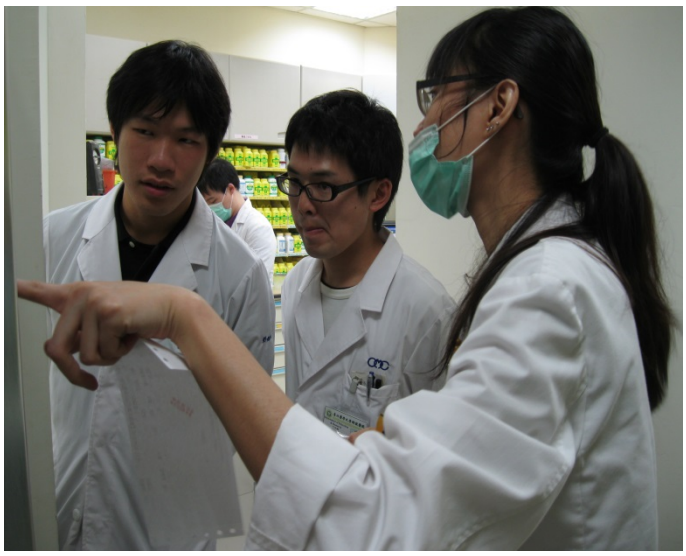
家庭医学科では主に外来の見学でしたが、訪問診療について行かせてもらったり、雙溪という田舎の衛生所（保健所）に行ったり、職業医の先生に桃園国際空港にあるレストランの視察に連れて行ってもらう機会を与えられました。衛生所では台湾の公衆衛生を守るために衛生所が行っている役割を教えていただきました。台湾の田舎には病院がないので、衛生所が診療所的な役割も担っていて、歩行不能な患者の往診もしていました。こうして台湾の地域医療は守られていることを知りました。

産婦人科には有名な先生が2人いて、一人は医学部長で不妊治療で有名な曾啓瑞教授と、もう一人はロボット手術で有名な劉偉民先生です。私は基本的には曾先生につかせていただきました。曾先生は台湾の不妊治療の第一人者で、他病院で失敗を重ねて最終的に曾先生の元へ来る患者も少なくないのだとか。実際曾先生の外来は毎日かなりの人数を診ていました。また、一度劉先生のロボット手術がちょうど予定されていたので、見せていただきました。台湾では国民皆保険ですが、一部自由診療も認めるという制度で、ロボット手術は自費で 20 万元（約 65 万円）という決して安価ではないですが、週に2、3回ロボット手術の予定が入っているという人気ぶりでした。日本では台湾のような混合診療が認められていないためロボット手術はかなり適応が限られており、あまり主流ではありません。なので、一度でもロボット手術を見ることができたというのはかなり良い経験になりました。

東洋医学科では東洋医学特有の診察法や鍼治療、漢方の調合の仕方などを教わりました。東洋医学は我々が今学んでいる西洋医学のように理論やエビデンスに基づいていないので、日本ではあまり重要視されていない傾向にありますが、台湾では医者や患者から一定の信用を得ていて、中医といって漢方専門の医者がいます。彼らはいわゆる医学部ではなく中医になるための学部を卒業して国家試験に合格しなければなりません。台湾では東洋医学をメインの治療で使うときもあれば、西洋医学の補助として使ったり、西洋医学だけでは治療が難しい難病に対して使っていました。東洋医学科を回ってみて漢方薬の魅力に初めて気づきました。日本でも漢方を学べるので、将来漢方の勉強もして西洋医学の大きな助けにしたいと思っています。

このように5つの科すべてが充実した実習でありましたが、実習以外の時間もかなり充実していました。台北医学大学の学生は本当に優しく、放課後や土日にどこかに連れて行ってくれました。去年 11 月に大阪医大に留学に来た台北医学大学の学生や実習で知り合った学生は本当にありがたくて、地元の人しか知らないようなところに案内してくれたり、台湾の学生はどんなことをしているのかなどいろいろ知ることができました。私は実習で出会った 5 年生の学生とかなり仲良くなって、日本に帰る前日の夜に farewell party を開いてくれました。このように国際交流で得た経験や仲間はずっと日本にいれば得難いもので、非常に貴重なものだと思います。このような貴重な経験をさせていただいたのは、河野教授、花房教授、米田教授、

中山センターの皆様、台北医学大学 international office の方々のお陰です。本当にありがとうございました。



**台北医学大学での臨床実習を終えて**

派遣時 6 年生　神部浩輔

今回、4 月 1 日～26 日の間、台北医学大学で臨床実習を行ってきましたので、その報告とこの機会を利用して、今までの 6 年間で行ってきた日本を含む（5 か国）での病院実習を通して感じたことを述べたいと思います。

まず、なぜいくつもの国で病院実習をしたのかについて書こうと思います。4 年程前、たまたまある発展途上国の病院に訪れる機会があったのですが、その病院では患者がベッドに収まりきらず床に寝かされていたり、物品が散乱していて清潔な環境ではなく、医療設備も貧弱に思えたりと私は日本の病院とかなりの違いがあるなと思いました。それ以来、外国の文化に大変関心があることも手伝って、それぞれの国や文化によって医療はどれほど異なってくるのか知りたくなりました。そのため、何回も海外で実習したのですが、異なる病院に行くたびに大きな違いを発見したかというと、決してそうではありませんでした。今回はいまだかつてない長さでの実習なので、台湾での病院はどのような所が他と違うのか、しっかり見極めたいと思い日本を飛び立ちました。

台北医学大学では 4 週間で形成外科、救急科、中国医学の 3 つの実習を行いました。

形成、救急については多少の違いは存在するものの日本のそれと診断、治療などに関して相違はない印象を受けました。やはり台湾でもたいした違いを見つけられなかったと落胆していました。しかし、今までと全く正反対の考えがふと頭に浮かびました、それは場所は違えども医療に違いがないのではないだろうかという考えです。各国、各病院で設備などの相違は大きいけれども、同じ西洋医学、同じ教科書で学んでいる医師の診断法、治療法に大きな違いは存在しないのは当然で、だからこそどこの病院でも大きな違いはないと感じていたのです。

ただ、中国医学（以下、中医）は他の科と違っていました。そもそも中医についての知識がほとんどなかったので、診断、治療について先生に教えていただいたときは驚きの連続でした。例えば、中医における診断は診ること、聞くこと、嗅ぐこと、脈を触知することの 4 本柱で成り立っており、特に脈を注意深く触知することで、その患者さんの疾患を診断できることがあるそうです。治療については漢方を使用するのですが、その漢方の中身が虫であったり樹皮であったり、到底私には理解できないものが数多く使われていました。あるとき教授に中医の限界と可能性について質問したのですが、限界は診断でどうしても主観的なことが多くなってしまうので、最近は西洋医学の画像診断など積極的に取り入れているそうです。可能性は治療で、まだ漢方や針治療など解明できていないことが多いので、これからもっと進歩するかもしれないと仰っていました。

今回の台湾での実習で医学の奥深さを知ることができました。私の普段の学習では、この疾患に対してはこの薬が利用されるといったようなことを覚えることが多く狭い視点になりがちでした。しかし、中医を学んだことで同じ診断に対して、全く別の観点から治療を行うことができるということを知ったことは私にとって医学に関して広い視点をもつきっかけになりました。台湾では中国医学と西洋医学は全く大学も実習も資格も別で互いのことを勉強できる機会はなかなかないそうですが、幸い日本の医師は西洋医学と中国医学を両方できる立場にあるので、中医も含め医学に関することを今後もっと勉強したいと思っています。

最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えていただいた先生方、留学の支援をしていただいた中山国際交流センターの方々、現地で私たち留学生によくしてくれた全ての人にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

**台北医科大学での実習を終えて**

派遣時 6 年生　藤田将司

今回私は台湾北部、台北にある台北医科大学で研修させて頂きました。

4週間で一般外科、呼吸器内科、ER、感染症といった4つの科を回らせて頂き大変濃い1ヶ月を過ごすことができました。

書ききれないくらいのたくさんの経験をさせていただきましたが、特に日本と台湾の異なる点について書きたいと思います。

第一に患者の数についてです。ER を回ったときにとくに驚きました。台湾に外来で受診するとかなり長い時間を待たされるらしく、それに比べて ER は待ち時間が少なく値段もほとんど変わらないので救急でなくても ER に来るそうです。たくさんの患者さんがいるので一人一人に時間をたくさん割けない中で本当に severe な患者さんをみつけるのは非常に集中力がいることで問診を的確に行うことが大事だとおっしゃっていました。大阪医科大学のクリクラでは救急をあまり見学する機会がないので、今後、台北医科大学で実習を行う後輩はぜひ救急を選択することをおすすめします。

次に驚いたのは学生についてです。彼らは 5,6 年時にクラークと呼ばれ、私たちがクリクラで回るのと同じようなポジションですが、内容は全く違いました。日本では参加型臨床実習という言葉をよく聞きますが、実際 5 年生の時のクリクラを振り返ってみるとほとんど見学しかしていなかった気がします。台湾の学生はグラム染色を手伝ったり、問診をとったり、手技の手伝いをしたりと本当に診療に参加していて私も手伝わせてもらいました。また実際参加するということは責任もあるということなので、そのためか学生は毎日遅くまで勉強して、論文なども積極的に読んでおり大変刺激的な毎日をすごすことができました。

私の英語が不十分なせいで先生に迷惑をかけることもありましたが、丁寧に指導して下さり大変勉強になった一ヶ月でした。また週末は現地の学生が台湾の観光名所に連れて行って下さり、勉強以外でもたくさんの思い出ができたと思います。研修に行こうか迷っている生徒は是非参加してほしいです。

大学でのクリクラは残り少ないですが、台湾で学んだことを忘れず出来るだけ参加型臨床実習を送り、自分だけで終わらすのでなく同学年の人たちにも伝えたいです。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせて頂く機会を与えて下さった、花房教授、米田教授、河野教授、中山国際医学医療交流センターの皆様、そして台北医科大学の先生、生徒に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

**（台北医学大学臨床実習受入　学生３名）**

平成 25 年 10 月 21 日から 11 月 15 日まで 4 週間にわたり台北医学大学医学部 7 年生 3 名（TSENG Kuo-Yuan 君、HUANG Sheng-Yun 君、CHANG Wen-Chu 君）が相互交流協定に基づいて本学附属病院、三島救命救急センター、国立循環器病研究センターなどで研修を受けました。学生たちはオリエンテーション、学内・病院見学ののち、それぞれの希望に沿って各診療科・教室で研修を受けました。また、課外活動として弓道部・茶道部の見学、週末の京都観光ほか本学学生との交流も積極的に行われ、医療技能シミュレーション室での本学学生指導による研修も研修終了後の時間を利用して参加しました。

＜抄訳＞

Tseng Kuo-Yuan (Roy) 君（台北医学大学7年生）

今回、大阪医科大学に留学して本当に良かったです。

日本は台湾ではよく知られている国です。食べ物、時間に正確、長生き、そして医学研究で成果を上げている、などなど。日本には4回行ったことがありますが、毎回又行きたいなと思える、そんな国です。

学生さんだけでなく先生方も一生懸命僕達留学生とコミュニケーションを取ろうとしてくださいました。関西は人が温かいですね。教授と一緒にご飯を食べるなんて母校でもしたことがないのですが、優秀な先生方と食事をしながら医療システムや理想的なライフスタイルや医療国際ボランティアについて意見を出し合ったり、何かしら有意義な事を教えて頂いたりアドバイスを頂いたりしました。医療技能シミュレーション室長（消化器外科）の林道廣先生には特に感謝しています。

毎日違う教室や診療科で研修をしましたが、短期でこれだけ多くの事を見聞きし、学校に溶け込めたのはこの研修スタイルのおかげだと思います。毎日違う視点からのお話を先生方から聞き、様々な視点から日本の医療環境を体験できたことがとても楽しかったです。

根本慎太郎先生の新生児の心臓手術見学は忘れられない貴重な経験でした。素晴らしい手術チームを率いて、難しい心臓の手術を高い技術力で6時間で先生は完璧に終わらせてしまいました。先生は手術がうまいだけではなくグローバルな視野を持った素晴らしいお人柄で、お話を聞いているとなんだかわくわくする小説を読んでいるような気分になりました。尊敬すべきお手本となる先生に大阪医科大学で会えるなんて、本当に忘れられない出来事です。

附属病院の他にも医療施設を見学に行きました。

三島救急医療センターでは、違う専門の先生方が一緒に危篤状態の患者さんを救うために働いていました。消防署と病院が緊密に連携したり、CT ルームとカテーテルルームを緊急処置室から3メートルの所に配置したりと素晴らしいアイデアが実際にそこでは具現されていました。

阪大病院に行った時には病院の屋上でヘリコプタードクターに会いました。台湾では日本の医療ドラマ「コードブルー」が人気で、実際どうやってドクターの先生方が働いているのか興味があったのでとても勉強になると同時に貴重な体験でした。

研修外で中山国際センターが用意してくださった大阪医科大学の学生さんたちとの時間もとても楽しかったです。茶道や弓道、嵐山観光など。茶道は本格的なものはなかなか経験できないと思いますが、茶道部の人に手伝ってもらってマナーや抹茶の正しいいただき方など、ひと通り体験させてもらえて、留学前に茶道を体験したいとは書きましたが、本当に体験できるとは嬉しい驚きでした。お世話になったみなさん本当に色々とありがとうございました。是非台湾にいらして下さい。「十倍返し」で「おもてなし」します。

Practicimg suture of blood vessel at Simulation Center

Huang Sheng Yun (Eddie) 君 （台北医学大学7年生）

これが自分にとって初めての海外研修でしたが、日本語は話せないし大学の代表として来ているのにちゃんと出来るだろうか？と研修前はとても緊張していました。しかし大阪医科大学の皆さんに会って、そんな心配はすぐに消え、とても充実した1ヶ月を過ごすことができました。

さて研修についてですが、先生方からたくさんの事を教えていた

だいて日本の医療システムには学ぶべき点が多いなと思いました。

まず初日に花房教授が学内案内をしてくださった時、シミュレーションセンターに行き、素晴らしい訓練機器がたくさんある事に驚きました。実際の患者さんに接する前に何回も心臓エコーやら縫合やら胆嚢切除まで練習できるというのは素晴らしいことです。

三島救急医療センターはとても印象に残りました。台湾ではグレーディングシステムが余りきちんとしていなくて、大したことがない病気なのに病院に来る人が多く病院のリソースの無駄が多いのです。

輸血室の河野先生のお話も興味深かったです。母校では輸血室見学はありません。輸血がどういう仕組みで運営されているのか初めて知ることができました。

台湾で「コードブルー」を見てからドクターヘリを見たいとずっと思っていたのですが、阪大病院の救急医療チーム見学に行った時に実際に見ることが出来ました。なんとヘリの中にまで入らせて頂けたので、さぞかし友人たちは皆僕を羨ましがることでしょう。

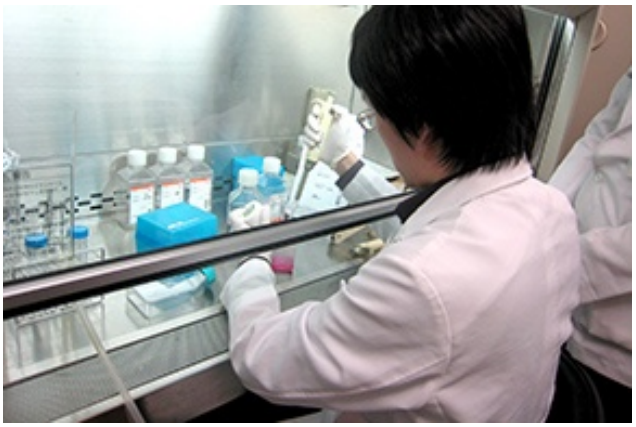
国立循環器病センターでは外来で先天性心臓病の子どもたちを大勢見ました。あんなにたくさんのケースは見たことがありません。センターの先生方の診療姿勢も素晴らしく、このような医者になりたいと思いました。

医学研修の他にも弓道や茶道などの文化的アクティビティが用意されていてとても楽しかったです。茶道部の人には茶道の所作には一つ一つ意味があることなど教えてもらいました。又、京都のお寺が好きなので街全体が博物館のような京都はとても楽しかったです。

医療技能シミュレーション室長の林道廣先生には特にお世話になりました。大阪医科大学の学生の皆さん、中山センターの松本さんにも滞在中いろいろな面で助けてもらいました。

大阪医科大学の皆さんありがとうございました。感謝の気持でいっぱいです。この1ヶ月は僕の大学時代の最良の思い出となりました。

Simulation Center (24 hour open)



Osaka University Hospital

Osaka Mishima Emergency Critical Care Center

National Cerebral & Cardiovascular Center

Chang Wen-Chu (Vincent) 君（台北医学大学7年生）

大阪医科大学の留学プログラムは他の大学のプログラムと大分違っていて、留学前は毎日違う診療科や医学教室に行くなんて余り勉強にならないのではないかと思っていました。しかし蓋を開けてみると優秀な専門家の先生方と短期間にたくさん出会えるという滅多にない機会だということがわかりました。特に小児心臓手術に立ち会わせていただいた根本慎太郎先生には感謝です。1歳の女の子の心房中隔欠損、心室中隔欠損の手術でした。稀なケースなので母校では見学する機会はまずありません。僕の興味があるのは循環器内科なのですが、この手術見学が留学中に一番自分に影響を与えたと思います。外科と内科の違いがあっても自分の患者がこういう手術を必要としていた場合に参考になると思います。

正直に言えば、時に台湾で医師になることが果たしてよいのかわからなくなったことがありました。医師の職場環境が最近あまり良くないからです。医療ミスを訴える裁判が増えてきており、その道の人の脅迫や患者の家族による暴力、時には普通のルーティン通りに医療行為を行っていてもこれらが避けられない場合があるのです。高等教育を受けた議員なのに機嫌が悪いという理由だけでスタッフ全員の前で看護師の顔を叩くといった事件がこれを書いている前日にも起こったばかり。大阪医科大学の学生さんに話すと「テレビドラマでしかそんなこと起こらないと思っていた」と驚いていました。日本の医療現場では医師と患者の関係が良くて羨ましいです。仕事がたとえずっと大変でも、そういう社会で医師になりたい。患者さんは医師を信頼し、医師も余計なプレッシャーなく仕事ができる、そんな環境を将来台湾で作りたいです。

話題として現在の日本医療における問題点、国民健康保険の良し悪しなどが出たのですが、日本語が理解できたらもっと得るべきものが多かったのかなと勉強してこなかったことを後悔しています。大体において医療システムは日本も台湾も同じなので、日本の抱えている医療問題は台湾でも起こりうる話です。日本から学べることは多いと思います。

この留学では専門を学ぶだけではなくて日本の文化と親しむチャンスも頂きました。茶道や弓道に始まってたこ焼きやお好み焼きや抹茶の体験など心に残る貴重な経験でした。

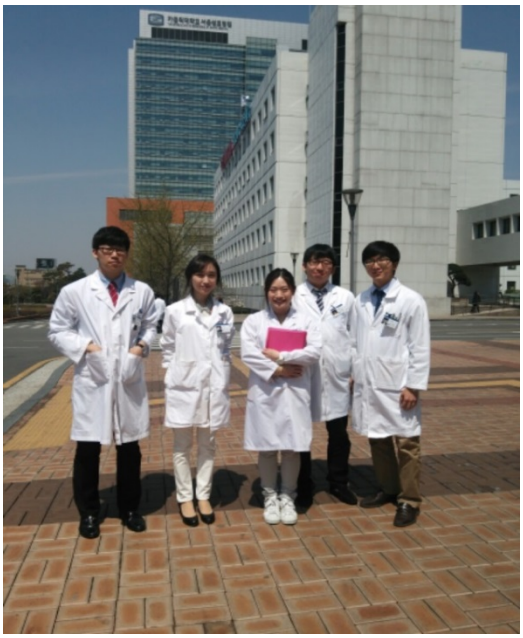
花房俊昭教授、林道廣先生をはじめとしたご指導いただいた先生方、大阪医科大学の学生並びにスタッフの皆様に大変親切にしていただいて心より感謝しています。

もし留学が再びできるなら、是非又大阪医科大学を選びたいです。ありがとうございました。

## ⑤. 韓国カソリック大学

**（韓国カソリック大学臨床実習派遣　学生３名）**

国際交流推進の一環の韓国カソリック大学との交流協定に基づいて行われる臨床実習に、平成25年4月2日から4月26日まで、森本有姫さん、片山美里さん、中山小百合さんの3名が参加しました。以下に各参加者の研修報告を掲載しています



**韓国カソリック大学での研修を終えて**

（中山　小百合さん）（派遣時６年生）

６年生になった４月の１か月間、韓国カソリック大学病院にて実習をさせていただきました。海外で実際の医療の現場を見学したり、また海外からの視点で日本のことを振り返ったりという機会はなかなか得られるものではないので、本当に貴重な体験をさせていただいたと思っています。

初めの２週間は脳神経外科、後の２週間は循環器内科を回りまし

た。

脳神経外科では、レジデントの先生について回り、手術見学や救急患者の処置、術後管理や検査、回診などレジデントの先生が普段行っている仕事を間近で見学することができました。循環器内科では、カソリック大学の学生と一緒に実習に参加させていただきました。intervention の有名な先生がいらっしゃるということで、カテーテルを受ける患者さんが多く、多くの症例を見学させていただきました。

病院には各場所にコンピューターが置かれており、電子カルテを使って患者さんの情報をスタッフ同士が共有できる設備が整っていたことがすごく印象に残りました。手術室の数や広さなども充実していました。

日本と韓国を比べて思ったことは、韓国では、医師、看護師、そして学生も含め、英語を話せる人が多いということでした。日本では先生や看護師の方と英語で話すことはないので違いはわかりませんが、学生に関しては圧倒的に英語ができる学生が多かったように感じます。医学書が韓国語に翻訳されていないという理由もあるのかもしれませんが、これから医師になる私たちにとって、英語でコミュニケーションがとれるということは、本当に大切なことだと思います。韓国で、私が循環器内科を回っているときに一度、マレーシアの病院から intervention の見学に来られた先生がいらっしゃいました。韓国の先生方も英語で何の苦も無く会話されていました。お互いに苦労した症例や珍しい症例について、話をされていました。多くの情報を得るという意味で、英語を話せるということは本当に強みになると感じました。また、海外から医師を迎えて話をし、情報を共有する機会があるという仕組みは良いものだと感じました。

日本のほうが優れていると感じた点は、患者さんへの配慮でした。術後の傷口の処置や、身体診察の際など、日本ならカーテンを閉めて周囲の患者さんから見られないようにと配慮するところも、韓国ではあまり気にしていなかったように思います。手術や検査、外来等も、日本とくらべると、数をこなしているという感じでした。

韓国と日本のどちらにも良い点と見習うべき点がありました。お互いの大学、病院で交流を持ち、改善していければ良いなと感じました。海外研修という貴重な機会を与えていただいたことをきっかけに、私自身も海外の状況にも目を向けて、日本の医療をより良くしていけるよう貢献していければと思います。

**韓国カソリック大学での臨床実習を終えて**

（森本 有姫さん）（派遣時 6 年生）

私は韓国カソリック大学附属病院で、消化器内科と形成外科を回らせて頂きました。

消化器内科では、2 人の韓国カソリック大学の 5 年生の学生とともに上部・下部を 1 週間、肝胆膵を 1 週間回りました。上部・下部は主に内視鏡の見学と授業で、先生方も英語をお話しになるので、英語での授業が多く、とても勉強になりましたが、事前に勉強した以上にマイナーな医学英語が頻出し、かなり苦戦しました。また、韓国カソリック大学の学生は、毎日の宿題レポートと担当患者さんの身体所見などのプレゼンテーションがあり、同じことをするように求められ、かなりきつかったです。レポートは英語で PBL のレポートのようなものを作成し、次の日に口頭試問で、身体所見は韓国カソリック大学の学生が一緒に行ってくれましたが、韓国カソリック大学の学生に迷惑をかけているという申し訳なさがすごくストレスになりました。韓国カソリック大学の学生への負担を減らすという意味でも英語の勉強はかなりして行くべきだったと思いました。

2 週目の肝胆膵では ERCP の見学や授業が多く、英語を喋れる先生が少なかったので、韓国語オンリーの授業ばっかりでした。朝のカンファ、回診、授業とずっと韓国語で結構きつかったですが、学生がかなりフォローしてくれ、環境に慣れてきたこともあり、学生とのコミュニケーションを楽しめた 1 週間でした。

3、4 週目は形成外科を回り、1 週目は 4 人の学生(6 年生)がいたのでとても楽しかったです。形成外科は外来とオペ見学が主で、いろいろな種類のオペを見学することができたので大変勉強になりました。モーニングカンファレンスもスライドは英語で、写真もいっぱい載っているので、専門用語がわからなくても大変興味深かったです。また、本学ではあまり見ることの出来ない美容整形も何件か見学することができ、すごく興味深かったです。

また、4 週目は学生がいなくて 1 人だったのですが、先生方に可愛がっていただき、また自由に興味のあるオペを見学出来たので良かったです。

実習以外では、韓国の留学生だけでなく、一緒に実習を回った学生達ともとても仲良くなることができ大変嬉しかったです。いろいろな思い出を作ることが出来ました。また、自分の英語スキルの低さを改めて実感しましたし、将来海外で活動したいという向上心もわき、視野が広がったように思います。また将来の目標などについても考えることが出来ました。

この 1 ヶ月で日本にいた同じ学年のお友達とは勉強面でかなりの差がついたかもしれませんが、そんなことは気にならないくらいの素敵な時間を過ごすことができたので、後輩達にも是非海外実習に参加してほしいと思います。

このような素敵な実習に参加させて頂き、花房先生、松本さんを始めとする関わってくださった全ての方々に感謝します。この経験をいかし、今後も頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

**韓国カソリック大学での臨床実習を終えて**

（片山 美里さん）（派遣時 6 年生）

今回の韓国カソリック大学での実習は私にとって初めての留学でした。

もともと英語は得意ではなかったので、留学前にはもちろん事前に勉強もしていましたがとても不安な気持ちでいっぱいでした。

実際現地についてみると、会話以前に人間性のほうが浮き彫りになると感じました。

留学へ行っても自ら質問をしたり、学んだりしない限りはいくら英語を話せても得るものは人それぞれだと思います。

いかに現地の学生、先生方とコミュニケーションをとるかで得る機会は大きく変わります。

私は形成外科と放射線科を回りましたが、自分が興味のある分野や見たい手術について積極的に発言するように心がけていたので、他科との合同カンファレンスにも参加できました。

しかし、もちろん医学英語という専門的なものに関しては苦戦しました。

韓国では医学韓国語というものが一般的に使用されておらず、医学生をはじめ先生方も医学英語を用いています。

日本語の医学用語と医学英語での用語では表現の違いがあることも多々あります。

そのことも踏まえて医学英語を勉強するべきだったなと感じました。

実習中には、カソリック大学の学生さんと一緒に回る週もありました。

そのため、英語だけの講義はもちろん、韓国語だけの講義を受けることもありました。

韓国語だけのときは学生さんに英語で説明してもらうこともありました。

そうするうちに仲よくなりましたし、とても刺激を受けました。

その出会いが今後何かの機会に繋がればいいなと思っています。

実習以外にも韓国で 1 ヶ月過ごすうちに韓国のいろんな場所や食べ物、文化、言語についても知ることができ、とても充実した 4 週間を過ごすことができました。

このような機会を学生のうちに得ることが出来て本当によかったと感じています。

今後、私のような留学に関して不安な気持ちを抱いている学生さんにも経験してもらいたいと思いました。

## ⑥. アムール医科アカデミー

**（アムール医科アカデミー学生短期研修受入学生 3 名）**

平成 25 年 7 月 10 日から 7 月 22 日まで海外交流協定締結先であるロシア・アムール医科アカデミーの Pavel Borodin 君（3 年生）, Dennis Vdovin 君(4 年生)、Artem Fefelov 君(4 年生)の 3 名が、海外臨床実習の一環として本学附属病院、三島救命救急センターで研修を受けました。

＜抄訳＞

### 大阪医科大学で体験したこと

Pavel Borodin
アムール医科アカデミー　2 年生

僕にとってこの留学は近年において一番意義のある出来事でした。ロシアでは珍しい腹腔鏡手術に感動したり、三島救命救急センターの見学も大変印象深かったです。

日本にある医療機器も、ロシアのクリニックではなかったりします。各診療科で最新の医療技術を先生方から教わったり、興味深い問題について話をしたり、重篤の患者さんの治療も見学させて頂きました。

シミュレーションセンターで腹腔鏡手術の基礎的な練習ができた事はとても良かったです。在学中に実技の練習ができるなんて素晴らしいです。

プログラムの文化的体験の一環として大阪城や京都の龍安寺、東寺、京都タワーなどに行き、祇園祭も体験しました。日本の人々は親切でどこに行っても僕達を歓迎してくれました。

また日本では汚い場所を見つけるほうが難しいほど通りが綺麗なことにも驚きました。

日本の医学を学ぶことができる素晴らしい機会を与えてくれた大阪医科大学の先生方そして僕達をお世話してくれた学生の皆さんにとても感謝しています。ロシアで、世界のどこかで、将来再会できることを楽しみにしています。

### 大阪医科大学での夏期交換留学に参加して

Artem Fefelov
アムール医科アカデミー　3 年生

初めはロシアで夏期医療実習をするかまたは日本に行くかで迷っていたのですが、日本に来たことは間違いなく正しい選択でした。日本で医学や医学教育について学んだ事はもちろん、新しい友人もでき、今まで見たことのないような美しい場所も訪れ、初めての事にチャレンジし、とにかくたくさんの事を学びました。親切な人々、高度な技術、ロシアとは違う文化や伝統。日本で新しい世界を見つけました。

研修中、毎日違う診療科や教室を回りました。中でも一番興味深かったのはメディカルトレーニングサポートセンターです。このセンターでは学生が腹腔鏡手術、超音波検査、内視鏡検査等の練習ができるのです。

また、大阪医科大学からそれほど離れていないところにある三島救急医療センターも同様で、ロシアではこういう施設（救急専門）は見たことがありません。

二週間が経ち、ロシアに戻らなくてはなりませんでした。大阪から東京へ、そしてハバロフスクへ。日本、ありがとう。いつの日かまた戻ってきたいと思います。週末に京都や大阪や高槻周辺に一緒に行ってくれた大阪医科大学の学生さんたちの事は忘れません。彼らと一緒に見た日本はとても楽しく、面白かったです。そして中山国際医学医療交流センターの皆さん、ありがとうございました。

### 大阪医科大学での短期研修に参加して

デニス・ヴドヴィン
アムール医科アカデミー　3 年生

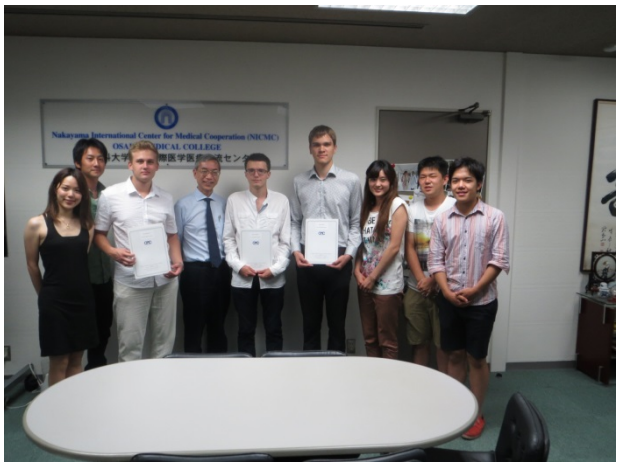
この留学を振り返ると温かい思い出が浮かんできます。初めての日本訪問。成田に着いた時まずその空港の大きさと美しさ、そしてそれがきれいに管理されている事に僕達全員が驚きました。長い旅路でしたが今まで見たことのないものを見て気持ちが高揚し、疲れなど感じませんでした。

大阪に着くと大阪医科大学の中山国際医学医療交流センターの方が迎えに来てくれていて、宿から大学までの道を丁寧に教えてもらいました。いろいろとお世話になりました。

次の日は学内・病院見学でした。先生方や職員の方々に暖かく迎えて頂きました。そしてその次の日から始まった研修では日本の医療の仕組みや健康管理システムを身をもって学びました。様々な診療科を回り、難しい手術を見学させて頂き、シミュレーションで手技の練習をしたりしました。

大阪医科大学の学生さんたちにも本当にお礼を言いたいです。短い研修期間の自由時間にできる限り多くの事を僕達に体験させてくれようとしてくれました。

是非又日本に行きたいです。そしてまず来年アムールアカデミーに来る大阪医科大学の学生さんに会えることを楽しみにしています。



■【看護学部】

**①. 台北医学大学**

**（台北医学大学看護学部生研修受入　学生９名）**

平成 25 年 7 月 1 日から 7 月 31 日まで海外交流協定締結先であ

る台北医学大学より看護学部学生 9 名が本学での研修のため来日しました。本学看護学部としての同大学からの初めての研修生受入れでしたが、看護学部国際交流委員会によって策定されたプログラムのもと、オリエンテーションにはじまり、本学附属病院、学外施設での研修等 1 ヶ月のわたる研修を全員無事修了しました。 このたびの研修に際し、ご指導いただいた竹中学長、林看護学部長、黒岩病院長をはじめ本学教職員各位に改めて御礼申し上げます。

**（台北医学大学への看護学部派遣　学生６名）**

本学では平成 24 年 3 月に国際交流協定を締結した台北医学大学(TMU)との学部生交流を看護学部にも拡大し、平成 25 年 7 月に 1 カ月にわたり 9 名の TMU 看護学部生を受入れ交流がスタートしました。今般、本学看護学部生 6 名が 3 月 10 日～19 日の 10 日間　TMU 看護学部にて研修を受けました。

渡航前に英語の猛特訓や、プレゼン資料の準備を行った結果、大きな成果と共に帰国できたようです。以下にTMUへの研修レポート（英語）と研修内容に関するアンケート回答を紹介します。

（研修参加者）
派遣時 4 回生　後藤樹莉、長谷川圓、渡邊早紀
派遣時 3 回生　井上絵里加、浦田喜子、畑美菜子

**Apprenticeship or Study Experience**

Name: Goto Juri　後藤樹莉

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

I wanted to experience and leaned about not Taiwan's medical care but also Taiwan's history or culture in this program.

Thanks to buddy program, I could get many helps from my buddy. It was great help for me.

I also could make a lot of TMU friends. They were very kind and friendly.

And they introduced me many places and I went to a lot of local places. So I could learn about local culture.

If I didn't have TMU friends, I could not meet many local people and learn about Taiwan's culture.

Meeting many local people, I found a lot of differences between Japan and Taiwan. That changed my horizons.

I had a great time with TMU friends. It is special memory for me.

I want to go to Taiwan and meet TMU friends again! I will never forget this nice memory.

Thank you very much.

Suggestions or comments:

I appreciate TMU professors and students. Because they heard my talk patiently when I couldn't speak well.

I want to go to Taiwan again!!

Thank you very much.

**Apprenticeship or Study Experience**

Name:Madoka Hasegawa　長谷川圓

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

There was a lot of new experience in the TMU.I was looking forward to the content of all of this in training.　Among them, I was interested in Chinese medicine. So, I'm happy that I was able to learn Chinese medicine in this training.

Chinese medicine is a field that is not yet widely known in Japan. So, I was very impressed when I first learned the concept of yin and yang. The concept of yin and yang, I understand that it is thinking to protect myself.

TMU students took us to various places. I saw a variety of Taiwan people in a variety of places. By that experience, I was able to know more deeply the Taiwan people and Taiwan. I think that it was possible to know the Taiwan from the side of both the people and medical care in this training.

I was able to find some of the differences between Japan and Taiwan. However, I think it is not so important. I think it is more important to respect each person's thought.

I really enjoyed my stay. The ten days flew by so quickly!

Thank you.

Suggestions or comments:

I thought that it was good if we met patients who are using Chinese medicine.

**Apprenticeship or Study Experience**

Name: _Watanabe Saki　渡邊早紀

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

I had good days in Taiwan. I really enjoyed my stay and the two weeks flew by so quickly! TMU students and teachers gave us a great welcome party. First day, the buddy program helped me to make Taiwanese friends. And they took us to many places and taught us their recommending Taiwanese foods and Taiwanese.

Some translators helped us. So I could get many good experiences and studies.

I could learn about many things through this training program. And I could learn about some deferent medical care, nursing and culture between Japan and Taiwan.

The most impressive program is Chinese medicine. I haven't learned about Chinese medicine before. So I got many things in this program. I knew Chinese medicine are used to treat cancer. I was surprised at it.

Many people supported me during my stay. I could learn about many things in Taiwan thanks to their. Thank you for taking care of me, I will never forget your kindness. I really appreciate it.

Suggestions or comments:

I want to learn about detail information in Taiwan as introduction at first day. For example, population, Live births, Total fertility rate, Infant deaths, perinatal deaths, Deaths in Taiwan and so on.

**Apprenticeship or Study Experience**

Name:Erika Inoue　井上絵里加

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

Everything which I learned in the TMU was valuable experiences for me. Above all, I had an interest in the Maternity Nursing and the Chinese Medicine in Taiwan. In Taiwan, compared with Japan, I got the impressions that Gender Mainstreaming policy has already spread all over the country. After the classroom, I was asked by one of the TMU students that "What do you think about the gender difference in Japan? I heard

that Japanese women always look up to men and let men have the credit for. Is it true?" She asked me. And I think gender difference has gradually narrowed in Japan. But actually, compared with Taiwan, I thought there are a wide gender difference in Japan. I also realized that there are differences about life plans of women between Taiwan and Japan.

About the Chinese medicine, we could learn the thinking ways of the Chinese Medicine. We actually saw the ingredients of Chinese Medicines and pushed the acupuncture points with each other. It was really stimulating for me. After the class, TMU students took us to a center where we could receive a foot massage. I was pushed a lot of acupuncture points there. We really enjoyed it and we could immediately see the effects of the acupuncture points.

Suggestions or comments:

In my opinion, after having the lecture of acupuncture points, I could have a good opportunity to go to foot massage. I thought the foot massage and acupuncture points are linked with each other. So I want to recommend next exchange students to go to the foot massage after the class.

Thank you so much, I could have an unforgettable time in the TMU.

**Apprenticeship or Study Experience**

Name:Yoshiko Urata 浦田喜子

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

I have not some experience in studying Chinese Medicine in Japan. So when I took a lecture: Introduction to Chinese Medicine, there are a lot of things that I don't know much about that. But as teacher kindly show us what Chinese Medicine is, I want to know about Chinese Medicine more.

I was surprised at difference of postpartum care between Taiwan to Japan. I realized about a different cultural background. I thought that is important to understand people of several cultures throughout the world. I thought of postpartum eating habits, as I ate a dish that postpartum mothers eat it for a month.

In nursing skill lab, I learned about difference and similarity between Taiwan and Japan. For example, system of class, ways of nursing care.

I went a lot of places with friends and teachers of TMU after school and weekends. I ate several Taiwanese delicious foods. And I learned the customs of other cultures. I had special times in Taiwan.

**Apprenticeship or Study Experience**

Name:MINAKO HATA 畑美菜子

Please write a short paragraph (150-200 words) with photos on your experience here at TMU

Thanks to your special program, I had a lot of experiences. Especially, I enhanced knowledge of medical care and was stimulated from TMU students.

We have few chances to learn about Chinese Medicine in Japan, so I didn't know that Chinese Medicine can be used for treatment of cancer. I was surprised at this truth. I think it is good for patient to choose a lot of way of treatment. I was also excited that there is collage for elderly people in elderly center. I think it will improve elderly's QOL. Next, through this program, I felt that TMU students have curiosity for a lot of things and everyone in TMU are kind. I was touched their active attitude to learning and their kindness. So all of these experiences influenced my way of thinking.

As I have said, I was excited from differences between Taiwan and Japan. It was special experiences for me to go to various places and know Taiwanese sense of values.

Thank you for everything you gave us.

Suggestions or comments

I wanted to learn about nursing education system and health care system of Taiwan. So I would like to suggest that you make a brief presentation about that next year. I also wanted to have more chances to talk to TMU teachers.

Thank you.

## 5. 第 13 回国際交流シンポジウム

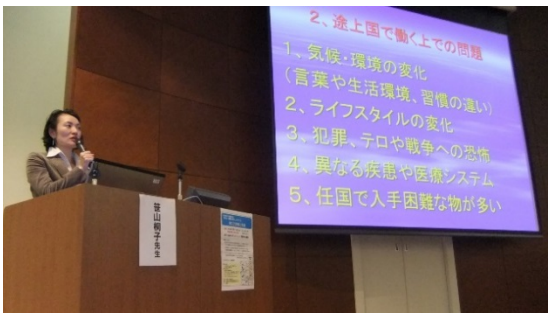
前掲のポスターの通り、2013 年 7 月 12 日(金)に、大阪医科大学看護学部講堂において、「第 13 回国際交流シンポジウム」が開催されました。

米田神経精神医学教室教授の司会で、花房 NICMC センター長の挨拶でシンポジウムが開会しました。

プレゼンテーションは録画とライブの混成で、本学の他に 6 大学が発表をしました。順序立てて列挙すると、中国医科大学(録画)、OMC(ライブ)、韓国カソリック大学(録画)、OMC(ライブ)、ハワイ大学(ライブ)、OMC(ライブ 2 演題)、マヒドン大学(録画)、OMC(ライブ)、台北医学大学(録画)、OMC(ライブ)、台北医学大学看護学部(ライブ)、アムール医科アカデミー(ライブ)、OMC(ライブ)の順に発表が行われ、どれも素晴らしい内容で、会場からは惜しみない拍手が送られました。シンポジウム終了後、場所を本館地下食堂に移して、更なる国際交流を深めるために、食事をしながらの意見交換会が開催されました。発表が白熱しすぎて、多少時間がタイトになりましたが、ホットな 1 日として、参加者全員の心に深い感動が残ったと思います。

## 6. 第 2 回国際交流シンポジウム（看護学部）

愛知県豊川保健所健康支援課　保健師　山本幸子シンポジスト「豊川保健所における外国人結核患者支援の体制づくり」




JICA国際協力人材部健康管理課海外班　国内健康管理員　笹山桐子シンポジスト「看護職の国際協力　～途上国で働く人々の健康管理の現場から」

ラテンアメリカ協会ラテンアメリカ・カリブ研究所　研究員　カルデナス　イバン　シンポジスト「米国の医療制度議論における文化的背景 ―健康は誰のものなのか―」

シンポジストによる質疑応答

2014 年 2 月 15 日（土）大阪医科大学看護学部講堂において、第 2 回 国際交流シンポジウムが開催されました。テーマは、『異文化理解と医療』（座長 矢野貴人教授）で 3 名のプレゼンテーターによるシンポジウムが行われました。保健師　山本幸子シンポジストは、外国人結核患者支援のため、予防的視点からのネットワーク強化および患者個々の生活状況に応じた服薬支援の重要性について、JICA　国内健康管理員　笹山桐子シンポジストは、途上国で働く JICA 関係者の健康管理の実際について、ラテンアメリカ協会研究員　カルデナス　イバン　シンポジストは、米国の根源的な思想である個人の自由や自治の精神を解説し、個人の医療に対する政府の役割などについて、写真を交えながら熱く語られました。参加者は 115 名（うち本学学生 96 名）で、講演の後は、活発な質疑・応答が行われました。参加者の関心も高く、具体的な実践活動や考え方の紹介を通して、異文化理解やグローバルな視点を広げる貴重な機会となりました。

## 7. 社会貢献（地域との交流）

2014 年 3 月 9 日に茨木市国際親善都市協会のボランティア活動団体である姉妹都市活動室(IIN)の日本文化体験ワークショップに韓国カソリック大学医学部の学生 4 名が参加しました。ワークショップではお習字、着物の着付け、茶道などが日本文化の体験が初めての外国人にも楽しめるように工夫されていました。このように地域の人達に温かく接してもらいながら日本の文化を楽しく体験することが出来たことによって、日本に対する理解が深まり日本への見方も変わったという参加学生からの感想がありました。

2012 年には JICA(国際協力機構)が招聘したインドの研修員が上水道整備及びフッ素症対策の研修の一環として高槻市市役所を表敬訪問し、高槻市環境科学センター、ウォータープラザ、高槻クリーンセンター等多くの施設を見学しました。研修員の各種施設への関心は高く、質疑応答が活発に行われました。

## 8. 交流協定締結校以外との交流

交流協定締結校との学生の交流については、NICMC においてすべて把握しているが、締結校以外との交流については把握し切れてはいない。しかしながら、今年度は下記の 2 大学について学生自身からの報告で把握することが出来た。

①スタンフォード大学

Medical Exchange & Discovery (MED) Program　3 名

②ハーバード大学

The Harvard Project for Asian and International Relations

Harvard Conference 2014　1 名

今後は出来る限り交流の全体像が把握できるように努力する必要があると考える。

### 9. センター長の医学英語勉強塾

当センターでは、学生の留学をサポートする一環として、学生の臨床英語力の向上を目的に、毎週月曜日の早朝(午前7時15分～8時15分)、希望者に対してセンター長が個人的に英語の勉強会を開催しています。2012年12月にスタートし、毎回、学年を問わず10名前後の学生が集まって一緒に勉強しています。題材は主としてNew England Journal of Medicine の Clinical Problem-Solving のコーナーから選んでいます。このコーナーでは、臨床症例を題材に、臨床現場での患者の状況や診断過程が述べられる合間に、専門医が数々の suggestion を現場に与え、徐々に正しい診断・治療に結びついていくスタイルで記載されています。本学の学生は、第3～4学年の PBL において症例のシナリオをもとに鑑別診断を進め、その疾患および周辺疾患について知識を得るという学習を行っていますが、それをより深く、また英語で行うことにより、臨床医学英語に親しんでもらい、留学先での臨床実習に役立ててもらおうという趣旨です。私がとくに留意していることは、臨床でよく使われる英語の表現に親しんでもらうことと、症例の主訴、現病歴、身体所見について内科の専門医の立場から解説し、臨床データの読み方、鑑別診断の進め方等において、様々な症状や検査データの異常を来す基本的な病態を考えることの大切さを伝えることです。
参加は自由で、学業が忙しいときに欠席するのも自由です。学生のレベルはまちまちですが、皆高いモティベーションを持って参加してくれています。留学先で英語の必要性を痛感し、もっと勉強したいと思い立ち、留学前とは見違えるようにしっかり予習してくるようになった学生もいて、教える側もやりがいがあります。私自身も学生達の向上心に刺激され、楽しみながら毎週一緒に勉強しています。この英語塾で学生の皆さんが楽しみながら臨床医学英語に親しみ、留学先での実習や将来の医師としての診療に役立ててもらえばと希っています。

センター長　花房俊昭

| 年度 | 開催回数 |
|---|---|
| 2012 年 | 7 回 |
| 2013 年 | 30 回 |

### 10. 留学奨学金

本学の NICMC における「海外交流支援制度」は、2002 年 4 月 1 日に取扱要領が作成され、それ以降実施されてきた。最も直近では、2008 年 7 月 1 日に要領が改訂され、現在までの運用に至っている。過去に支援制度を利用した人数は、派遣が 10 名で、受入が 4 名となっている。2013 年度も 1 名を派遣し、2014 年度についても複数名の派遣を予定している。

この支援制度の目的は、学部学生、大学院生、研修医、ポス・ドク、非常勤教員、特別研究員を対象として、研修及び研究を目的とした海外留学、海外からの留学生を積極的にサポートするために設けられた。

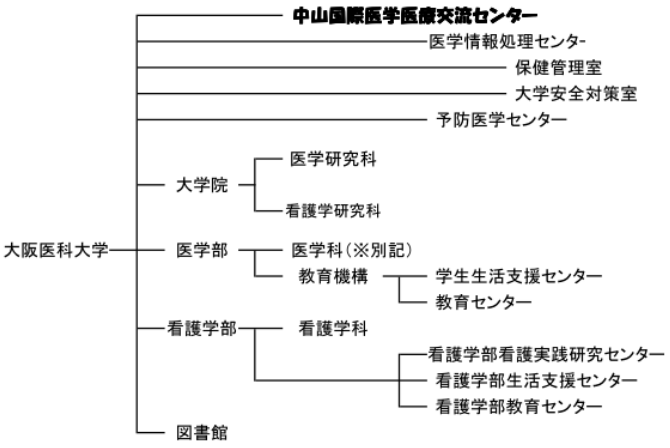
支援する内容としては、6 か月以上の一般留学並びに受入留学とした。

支援金は、支援を希望する該当者に対し、NICMC の予算枠の範囲内で決定するが、応募の状況により弾力的に対応するものとしている。

支援金を受給した留学生は帰国後 1 ヶ月以内に留学成果報告書を委員会宛に提出することが義務付けられており、また同様に、受入留学生に対しても、帰国までに留学報告書を委員会宛に提出することが義務付けられている。

### 11. 資料(組織図、交流センター関連委員会他)

中山国際医学医療交流センター(NICNC)は、大阪医科大学直結の組織であり、学長の指導の下、センター長を中心として、運営委員会での議論を経て、運用が図られている。また、毎年綿々と行われている国際交流活動に対し、附属病院の各診療科の教員から、多くの積極的な協力を受けている。勿論、国際交流活動は単なる一部署で行えるものではなく、全学で取り組んでいるから行えると言えるであろう。




※大学組織図より一部抜粋

## 12. 2014 年度 年間交流計画(予定)

| 大学名 | 派・受 | 日程 | 人数 |
|---|---|---|---|
| 韓国カソリック大学 | 派遣 | 3/31~4/25 | 4 |
| 台北医学大学 | 派遣 | 3/31~4/25 | 4 |
| タイ・マヒドン大学 | 派遣 | 3/31~4/25 | 4 |
| 台北医学大学 | 受入 | 4/7~5/1 | 4 |
| ハワイ JBSOM | 受入 | 6/30~7/11 | 4 |
| 台北医学大学(看護) | 受入 | 7/7~7/18 | 5 |
| 第 14 回国際シンポジウム | | 7/11 | |
| アムール医科アカデミー | 派遣 | 7/28~8/9 | 3 |
| ハワイ夏季 W.S. | 派遣 | 8/3~8/8 | 8 |
| アムールカンファランス参加 | | 11 月~12 月 | 予定 |
| マヒドン大学(予定) | 受入 | 2 月~3 月 | 4 |
| 韓国カソリック大学(予定) | 受入 | 2 月~3 月 | 4 |
| ハワイ春季 W.S.(予定) | 派遣 | 3 月 | 未定 |
| 台北医学大学(看護)(予定) | 派遣 | 3 月 | 5 |
| タイ・マヒドン大学(予定) | 派遣 | 3 月 | 4 |

## 13. その他

### ※ 各種統計実績

**＊大学別受入・派遣人数(2011～2013)**

| 年 | 2011 | | 2012 | | 2013 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 |
| Amur State Medical Academy | | | | | Russia | |
| | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 | 0 |
| University of Hawaii | | | | | USA | |
| | 3 | 14 | 4 | 16 | 4 | 9 |
| Mahidol University | | | | | Thailand | |
| | 3 | 6 | 3 | 0 | 4 | 7 |
| China Medical University | | | | | China | |
| | 2 | 5 | 5 | 0 | 2 | 2 |
| Catholic University of Korea | | | | | Korea | |
| | 3 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 |
| Taipei Medical University | | | | | Taiwan | |
| | — | — | 4 | 0 | 3(9)注1 | 4(6)注1 |
| University of Wisconsin | | | | | USA | |
| | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| **合計** | **11** | **30** | **20** | **23** | **29** | **31** |

※注 1:カッコ内は看護学生

### ※ NICMC の過去実績(2004～2013)

| 内容＼年度 | 2013 | 2012 | 2011 | 2010 | 2009 | 2008 | 2007 | 2006 | 2005 | 2004 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 協定校からの学生受入人数 | 29 | 20 | 11 | 11 | 12 | 5 | 10 | 3 | 8 | 0 |
| 協定校への学生派遣人数 | 31 | 23 | 30 | 24 | 14 | 13 | 3 | 11 | 5 | 10 |
| 協定校外からの学生受入人数 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 6 | 8 | 0 | 0 | 0 |
| 協定校外への学生独自参加人数 | − | 13 | 4 | − | 2 | − | − | − | − | − |
| 海外から来訪者 | 12 | 14 | 5 | 64 | 40 | 28 | 24 | − | − | − |
| JICA 受入研修員数 | 0 | 15 | 22 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 協定校における国際カンファレンスへの DVD 参加学生数 | 1 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 年度における新規協定校締結数 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 国際シンポジウム開催回数 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 国際シンポジウム後援数 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ハワイ大学 PBL ワークショップ開催数 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 抄読会開催数 | 30 | 7 | | | | | | | | |

(ー)は確認出来ていない

2014 年 10 月吉日